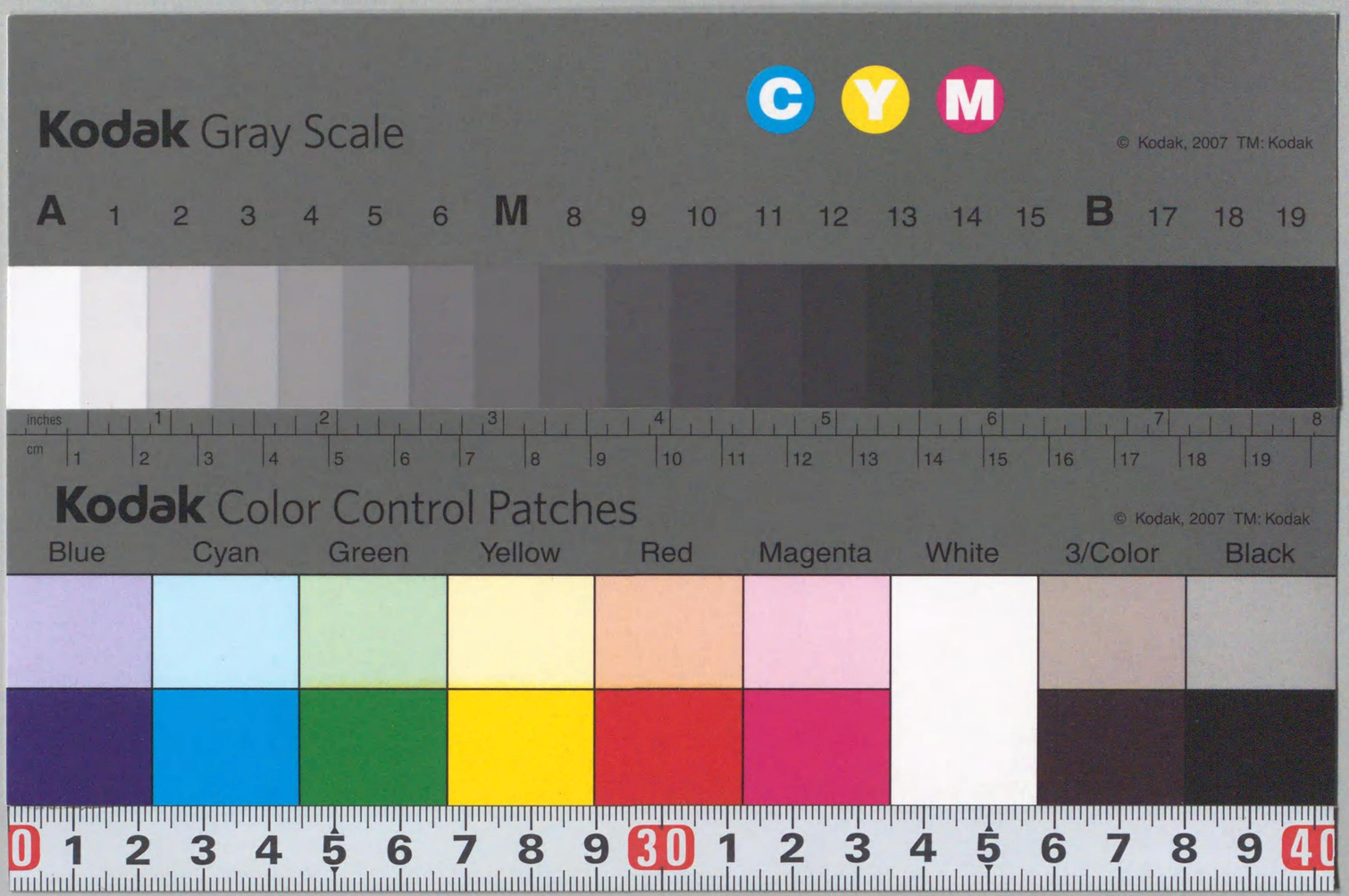

813.6
I619g
Wad

十卷 [illegible]

813.6
I619g
Nnf

○奈の部

石川雅望 集
中島廣足 補

なれ 汝也（万）十一、十三「夕されバとこのへさらぬつげ枕いつ一かなれがぬ一まちがさ
ね（古）雑下、よみ人しらず「千とやぶる宇治の橋もりなれそ一ぞ哀といおもふと一のへぬれ
バ（補）（源わかな）下、六「こひとぶる人のゝたゞと手ならせバなれよ何とてなく音なる
らん（月詣）五懐綱「なれがくむいさるの水の雫ともおとらぬものをこふる涙ハ（千
載）冬俊成「そま社闕ありあけの月よりく千どりかたふくかけやなれもかなしき。（四の
句ナルハ類句本ニ出タリ）（万）三、廿五「岩や戸にさてる松樹（ノキナ）汝をみれバむら一の人をあひ見るで
と一（同）九「難波ゞゝをゐひにいそへたまもかるあまをとめどもなが名のらさね
（同）十七、五「あのとみのふとのりとでといひもらへあゞふいのちもさらためと奈
禮（同）十四、廿四「あづさゆゑ末ハよりねむまさらこそ人めをおゐゑをもし一ゐおけれ
（同）廿五「こもち山わゝかへるでのもみづまでねもとゐハもふ汝ハあをらもふ〇近
ころ或人「ふりつゑ一梢ゐをたく朝ゞらになれのゑ雪の色なゝりけりとよめり一

国立国会
41.3.31
図書館

691343

此あれいあさらぎそれのごといふべき所也あれい汝よて其ものにむかひさーつけていふ語なり

なれ　馴也（古）戀五、よみ　人しらす「こてもまた又も見まく欲そーなれば／＼を人いいとふべらなり（源竹川）廿八　いづれの御方よもうとからぬあれまゝらひありき給ふ（同若紫）八　白ききぬ山吹などのなれたるきて（同とし姫）十　あやーきけをなどるあらびさる山がつどもよてまれよまれまるりつかうまつる（同ゐかし）十五　かういあれきこゆれどいとけだかう心もづかーき御ありさまよさこそいひーがつゝまーうなりて（同かけろふ）卅　水よなれ月をめでゝ御あそびたえぬ常よりも今めかしーければ云々（柏）戀四、よみ　人しらそ「おもふとていとこそ人よあれざらめやからひてぞ見ねば戀ーき（源花のえん）七　またよよあれぬい五六の君あらんかー（同うき舟）卅三　都なれゆく有さまのをうーきも（万）十二、廿二「みかりをるかりばのをのゝあらをのなれいまさらで戀こそまされ（榮衣の珠）廿九「まだなれぬこやまがくれよをそむる谷のあらーいいかゞふくらんとあればなかたにの御かへー「谷風よなれをといかゞおもふらんこゝろいもやくをよよーものを（源とし姫）廿四　さーもおどろかさせ給ふをかり聞えあれ待らば（同夕かは）十二　手をとらへ給へれいとなれてとく云々（同竹川）五　女房よもけぢかうなれよりつゝ云々（同とし姫）廿七　朝夕よつかうまつりなれ侍りーよ（同手習）五　狐いさこそいと人をおびやかせどことよもあらぬやつといふさまいとなれたり（同みをつくし）十　あれて聞ゆるをいたーとおぼを（同すゑつむ）卅一　紅のひともなごろも　云々　あはーたてぎばこゝろぐるーれ世やといといさうあれてひとりでつを（同ゐふひ）五十一　あれいまさらぬ御ねーきのおゝろうきことをうらさきおえたまふ

○あれがは（源藤のうらと）十一　云々などいとなれげはなり（同うき舟）十七　ちかうよりて御ぞどもぬぎかねがそにうちふーい給へれば

○あれ〳〵ーく　なれ〳〵しき（空穂　嶽開）下六　十おとゞ宮ゐり給ひてや九の君よあれなきーき事あらんなど（源帚木）三十　あれ〳〵ーくふるまひさり（同さわらび）十九　その事とおく聞えさせんもおかゝ〳〵なれ〳〵ーきとがめもやとつゝと侍るぞよ（同さかき）三十一　あれ〳〵ーゞよこのらの澄そゞりの紙よさかきよもふつけなどかう〳〵ーうおゝーて参らせ給ふ（同朝かを）十六　いさゝ川あどもあれ〳〵ーやとてせちよ打さゝめきかたらひ給へど（同みゆき）五　あれ〳〵ーき筋あどをゞもてもあれて（落くぼ）一一　卅　とのゐ物よて一つをりさりをるをいとおのびて奉るとていとなれ〳〵

おう侍れどもまた見しる人の侍らばこそあらめ

○なれむつび（源かしわ木）廿四年比なれむつび聞え給へるを

○なれゆく（源とべきべ）廿五 なれゆくまゝに哀れとおぼえしらば

なれ フルビヨ（万）七、廿 「おのよそよそしくなれをおもひ下きてなれにし衣そとりてきめやも（同）九、三 ひもとのぞまろねをそれば吾きさる衣になれぬ（源わかむ）四 御てうどもいと古代になれのそこしなれたるが下そたれより（同よもぎふ）四 たるがむかしやうにてうるはしきをなまじ物の故しらんと思へる人さる物えうとてさゝとその人かの人ませさせ給へるとたづね聞て案内をするも

補 なれば（更科日記）おくのかたなる女どもなどかくしありるべきとふなればいかや心もしらぬ人をやどしたてまつりて（同）舟のうちのおとときこゆとふなればあそびのきさるなりけり

補 なれでろも（万）十五、長歌十一 妹がきせてしなれでろもそでかたしきてひとりかもねん

なれこまひ（長門平家）四 なれこ舞などかたのでとくらかなでゝ補（盛衰記）九 康頼ヶ〻詣ノ條 王子〳〵の御前にてなれまひをば仕らる（義經記）七、四。北國オナノ處 清河に着給ふ

云々 其夜は五所の王子の御前に一夜御つやあり此清河と申は羽黒權現のえたら也 云々 まゝにておの〳〵ありをかき王子〳〵の御前にて御かぐらなど参らせて思ひ〳〵のなれまひし給へば夜はその〳〵と明ぬれば

なれそがた（源わかむ）下、五 十九 さばかり世にき御ありさまを見奉りなれ給へる御心ま數にもあらぬあやしきなれすがたそうちとけて御らんぜられんとは更に思ひがけぬことなり

なぞ（源東や）卅四 なぞの車ぞくらきそどよいそぎ出るいとめとゞめさせ給ふ（枕）四、十 修理亮則光いとゝきまよひ申ゐ清ノうへにやとて参りつるといへば清詞なぞつゝさめしありとも聞えぬに何にかあらん給へるぞといへば（源わか紫）卅七 なぞこえざらんと打ぜしく給へるを（同わけまき）廿八 あまがしくなぞの物かつかせたまへんあまが（同よこ笛）三 御まへちかやらいしどもをなぞあやしと御らんぜるに院の御文あり（源わかむ）上、八 十九 なぞの箱ぞ（同末つむ）卅二 心ぬり（宇治拾）十三、一 あの石はなぞの石ぞ（源わかむ）上、八 十九 なぞの箱ぞ（同末つむ）卅二 心ならぬ人はなぞ御ひとりゐさいとゞがめあへり（同うつせみ）三 なぞかうあつれにかし）卅七 なぞや心づから今もむかしもをべろあることまて身をそふらひはらん（同やとり木）廿二 むのしれ人の御おもゝろおきてをもたがへておもひくまなのりけ

見ん（夫）三行家「とも一火を月よなぞへてもるの夜のやそよも見めるやどの梅がえ（拾）戀三（万）十一、「久かさのあまてる月のらくれなゐ（妹万）何よなぞへて君をおのをん

補（万）二十、十三「秋といへばこゝろぞいさきうたてよ花よなぞへて見まくほりかも（同）八、十九「とがやどよまれ一なでしこいつ一かも花よさかなむなぞへつゝ見むなぞへおく（いせ物）九十三段「おふなゝ思ひをべ一なぞ、へおく高きいや一きくるしかりけり

補 なぞらふる（伊勢物）廿一段「あきのよの千夜をひとよになぞらへて八千夜一ねむとあくときのあらんかへし「秋のよ千夜を一夜になせりとも詞のこりて鳥やなきなん○なぞらふるといふ詞ゐおにといふ詞のれをゝりさる也らへ一の歌よてをるべ一又なぞらふるともいへり

なぞ〳〵（枕）七、廿五 人のなぞ〳〵合し一ける所よ云々あなさの人もこなさの人も心もとおく打守りてなぞ〳〵といふをぞいと心もとな一 補（小野宮右衛門督家歌合）よなぞあいせ

補 なぞ〳〵ものがたり（俊頼集）なぞ〳〵物語よくとくと聞えける人のもとへつくりてつらいゝる歌「小倉山峯よりいでゝ行月もあふ坂までいくまがりけり

んとくゆる心のこまさりて心よこのゝりたるもむづかしくなぞや人やりならぬ心なるらんと思ひかへし給ふ（同）四十四 もづかしう心づきなくてをい給ひぬるをこいなぞあなよか〳〵（同ぁふひ）十 あぞやかくかさみよそ〳〵一のらでおいせよか一（後）戀三、いまき「世とともよなゆきまりつむ身よ一あれゞあぞやまもりのあるこのひもあき（散木）中、八「あぞもかくよかれそめけんひたちなるかしまの帯れうらめ一の世や（古）秋上貫之「誰あきよあらぬものゝ女郎花あぞいろよいでてまた兒うつろふ（同）戀二是則「おるしなきおもひやあぞとあ一たづの音よなくまでよあいをこびしきにるひだのさくこゞたつきおとあなかしのましなぞやよの中（古）戀一人しらす「人一れぬ思ひやあぞとあ一垣のまぢらけれどもあふよし一れあき

あぞへ（万）廿、四十六「うるわ一こあがおもふ君わなでしこの花よなぞへて見れどあかぬらも（同）十八、「ほとゝぎすこゆあきこえされともし一びを月夜よなぞへそのかゞも

。北邊隨筆に說あり（實方中將集）小一條殿のなぞ〳〵物ぐたりよ「かたぎまけぎの花のうへの露といひけるよ云々

あづ（撫）なで（拾）賀、よみ人しらす「君が代ゝ天の羽衣まれにきてあづともつきぬいもはあるらん（つれ〳〵）百四十二段 民をなで農をすゝめ（續紀）一、二 天下乃公民乎惠賜比撫賜牟止 奈母（源 薄ぐも）六 あでつくろひつゝるたり（同東や）三 明くれなでかーづくあとかぎりなー 補（後拾）賀、藤三位「おもひやれまだつるのこれおひさきを千世もとあづる袖のせもさを（万）七、一 あーさよいとりあでたまひ（同）廿 やまぶきいなでつゝおほさんありつゝもきみきまーうゝかざーたりけり 補 あつのぐら（夫）七、法印幸德「夏かぐらけふやーつらん卯花の白ゆふゝくるゝもの川なそ

補 あつかけ（拾員）上「我やどにけふの子の日の松うゑて風まちつけむ末の夏かげ

あつかー（猿丸）十（古）春下、よみ人しらす「春雨よ匂へる色もあかあくよかさへなつかー山吹の花（六帖）五、下「大和琴人よありせばいかかりことをつかーひおとゝきこのまー（同）同「されぞこのころなつかーきやまとでとねざめびーき人のきかくよ（同）六、上「秋風やよもぎがやどよ吹ぬらんこゑあつかーくあくきりー〳〵を（源 桐つぼ）十七

あつかー うらうとゞかりーをおびー出るに（遊仙窟）十四 嫂婷（ナツカシ）（源 空蟬）十二 小うちぎれいとなつかーく人ゞよめるを（同）十一 あぞかよそよてもあつかーひいらへをりいO宣長云スベテ此詞ハナツクト云詞ヲハタラカシタルニテ柔ラカニシタシクムツマシク思ハル、心也俗ニ云意トハヤ、コトナリ（源 帚木）十六 目よ近き人の家居あ 來こう 契本りさまゞよと見えなつかーくやとらびたるかさあぞを（蜻蛉日記）上、下 十六 きこりーたるゞもとゞもあやーゞある柚や梨やなどをなつらーゞよもたりてくひなどをるもあいれよ見ゆ（うつほ 樓の上）上、六 十二 をざく院いけぢかくなつのーくてよろづれおとゝりなる事をのたまいせ云々（万）八、十 五 「春れ野よそれつゝよおーこれぞ野をなつかーゝ一夜ねよける（同）七、三 十二 「いそぐねのおゞろき山よ入そめて山なつらーきの國のいもせ山よあさまくゝいでがてぬかも（同）同、十 八 「麻衣されがなつのーきの親シクムツマシキ意也吾モ麻衣ヲキテアレバ麻マぎもO宣長云俗ニ云トハ異ニシ妹ニ緣アリテムツマシク思ハルト云意也 補（万）十九、十八 長歌 云々さよかよおくゝ不とゝぎれそつあるをきけばなつかー云々（同）十九 さよふれてあかとき月よ影ゑえてなくほとゝぎれきけばなつかー（同）十九、七 「我門もあきをぎわたるほとゝぎれいやあつのーくきれどあきたらぬ（同）八、十 九 「よのつねよきけばくるーきよぶおどりよ

ゑなつかーき時よいかりぬ(同)十七、ゑとゝぎす夜でゑなつかー云々(源末つむ)一冊
「なつかーさいろともなーよゝおれ末つむ花を袖にふれなん(万)十七、四「たまぼこの道ゆかえたちまひわせむあがおもふきみをなつかーこせよ(人丸)(万)九
「梅花まづさく枝を折もちていとゞなづけく袖をえんかも
なつゝかさ(狹)四、上四夏つゝたより母上あやまーぶよー給ふを
なづな(夫)卅六。遠樹細ト濟有家「山高みふもとの里を見わたせばよものこぞゑいなづなりけり
補 なつかり 夏中(貫之集)「夏なかよ秋をしらそる紅葉の色をかりてそかいらざりけれ
なづむ み(蜻蛉日記)中、上廿三草ぞもつくろいわせなどせーよあまた若苗のおひたりーとりあつめさせてやのきよあてゝうゑさせーがいとをかーうそらきて水まかせおぞせさせーかと色づける葉のなづえてさてるを見れゞいとかなーくて「稻づま光りだよこぬやゞくれゝ軒ぞの苗も物おもふらー(土佐日記)八日猶川のぞとりよなづえてとりかひのみまきといふ所よとゞまる(万)十九、二「ふる雪をこーよあづえてまるりおーゑるーもあるかとーのそゞめよ(源若紫)卅四「いとけなきたづの一

こゑ聞ーよりあーまよなづむとれぞえならぬ(万)七、十「白さへよよゑふまつちの山川よわが馬あづむ家こふらーも(同)七、八「ぬえさまのわが黒かみゑふりをづむあめれつゆーもとれゞきえつゝ(つれ〳〵)百十五段放逸無慙のありさまおれども死をかろくーてそこーもなづまざるかさのいさぎよくおゞえ(同)百五十段道よあづまぢみたりよせぞーて(古事記)中、四許斯那豆牟云々又入其海鹽而那豆美行時云々(万)二、卅三
岩根さくゑてなづみこー(源よこ笛)十五まことゑ此君なづみて泣むづりありー給ひつ(万)十三、「父母よおらせぬるゆゑえやけ道の夏野の草をあづみくる鴨(仁徳紀)十三「あよいびと鈴ふねとらせ許辞那豆瀰その舟とうせおぞえふねとれ補(後拾)「えち孔くれあたちのこまいあづめぞもけふあふさかのせきまでいきぬ(万)四、四十六「かくーてやなぞやまからむちかゝらぬ道のあひだをなづえまる來て(同)二、四石根割見而奈積來之(隆信集)「とるゞーといく野の道の末とぞいり日さしまよ駒いなづみぬ
あつのむー(盛衰)八、十常の御詠吟よ智者ゝ秋の鹿鳴て山よ入愚人ゝ夏のむーとんで火よ焼とぞ詠せさせ給ひける此ゝ止觀行者四種三味の大意を釋ーける絶句とや(仁徳紀)十那菟務始能譬務始能虛呂望ふさへきて云々

かつく　き　け　馴付也（万）五、十七「春の野ゝ啼やうぐひにかつけんとこがやのそのゝ梅が花さく（後）五、よみ人「やとゝぎにかつきそめゝーくひもおくこゑをよそゝも聞わしらすさるかな（源わかな）上、一百「猫ゝまたよく人ゝもかつかぬゝや綱いとかくつきさりけるを（同）下、五「またかつきがたきゝこゑれぬひとをもるゝやあらん（蜻蛉日記）下、十七「さゝこゑばあれまそまさめ草がれの駒かつくべき森の下かゝ（万）六、四、十三「なつきゝーー奈良のそやまのあれもけばいでたつでとゝかつきーまをも（源わか紫）十五「此人をなつけこのたらひ聞え給ふ（同わかむら）十九「かうとりこきて人めかーかつけ給ふめけん（同）序「かづけて古今和歌集といふ（人丸）九「梅の花まづ咲枝を手折（折もち）てゝつとゝなづけてよそへてんのも補（万）六、四、十三「名付西（ナヅケニシ）からの京のあれ行ば出たくがね（好恵集）「よそゝ見ーおもあらの駒も草なれておつくをかりゝ野ゝかりゝけり

かづく（古）物名、眞さゝい法師「煙たちもゆとも見えぬ草の葉をされりこらびとかづけん（同）序「かづけて古今和歌集といふ（人丸）九（万）十、十六「梅の花まづ咲枝を手折てゝつとゝなづけてよそへてんのも補（万）六、四、十三「名付（ナヅケ）西からの京のあれ行ば出たつでとゝなゝきーまさる

なつやせ（狭）一、上、廿五「かつやせゝえせ物の事ゝとかや（万）十六、廿三「石まろゝ我物申ゝ夏やせゝよーといふ物ぞむさき取めせ

かつふゆ（伊勢物）七十九段「わがかどにちひろあるこの夕をうゑつれゞ夏冬されりかくれざるべき

かつでろも（古）戀四友則「蝉のこゑきゝばかなーな夏衣うすくや人のおらんとおもへゞ（後）戀六、よみ人しらす「夏衣身ゝいなるともわが爲ゝようすき心ゝのけぢもあらんかな（六帖）一、上、貫之「夏衣たちきるものを逢坂の關の清水のさむくもあるかな（同）同（素性集）五「春たにもありー心をかつ衣いかゝようにさのゝふをさるらん（新千）戀四花山院「夏おろもかふるゝつけてつらきかなうすき心ゝかたゝを思へゞ

補　かつこざち　夏木立（千首）師兼「冬がれゝ月のくまとて見ーもどの影たゝもらぬ夏木立かな

なづさふ　ひ　（古事記）下、廿九「うきーー阿夫良淤知那豆佐比（ナヅサヒ）（万）卅五「うみぢらのとはきゝたりをゝやびをのあそぶをゝんとなづさひぞこーー（同）三、四十八「八雲さいづるものこらがくろかみゝよーー野の川のおきゝ名豆颯（ナヅサフ）補（万）十五、十一「「山のもゝ月のさふけゞいさりにるあまのともーー火おきゝなづさふ（同）十、云々「ほとりのなづさひゆけゞ（同）十五、廿四「おゝの上ゆなづさひきゝて（同）十五、十三「あゝくれゝ沖ゝなづさふかもそらも

（同）十七、四　かゞりさーあづさひのやり（同）廿一　おくら川あづさひのやり云々（同）十五　九、廿「いとまあらバ魚津（ナヅ）柴比（サヒ）わさりむらつをのさくらの花もをらまーものを

あづさふ　ひ　宣長云万葉ニイフトハイタク轉ゼリ（散木）下、四（堀太）暁「あけぬなりをもをーまぎれよかりころもたづねんほどに猶なづさハんかよりなづさひーものゝ（同）五　いとおもたゝうあづさひつかうまつりねん（同）十　桐つゑ）廿五　常に參らまほーうあづさひ見奉らばやとおぼえ給ふ（堀太）萩　俊頼「秋萩のそゑ葉の露になづさひてさまにもおかいぬをり衣きつ（續世繼）序これも戀しけれバをもをーもなづさひ奉らん　補（拾玉）七「尋來てあづきふ田子のうら風よ袂をあらふ春の藤なみ

あづさハり　馴ル也（六帖）五、上「夜もすがらあづさハりぬるいもが袖名殘戀しくおもほゆるのみ（拾）十、ろく「そてぐらにあらまー物をそべ神のみてよとられてあづさハるべく（同）雜春　長能「雪そうをゑ垣根につめるからなづさハまくのほーき君のみ（賴政集）下、十五「をゑおべーそのかさおひハめもたえてもなのさかりぞあづさハりぬる　補（拾愚）上「万代の春秋きみよあづさハん花と月とのをゑぞ久ーき（狹二、下）大將の御ありさまそもあづさハまほーうおもひきまえたるおとこかりぞ○玉勝間

六、廿八よ説あり

あづき　みやうぶトモ。此書ヤウ委シク台記ニ見（後）雜二　名鴻ナリ　エタリ明月記ニモアリ　詞　もとより友だちよ侍りをれバ貫之よ相かたらひて兼輔朝臣ぢ家よ名づきをつさへさせ侍りねるよそのなづきよくへて貫之わおくりねるみつね云々（うつほ　藤原君）廿七　人のそこら奉る名づきをとゞめさせ給へバそゞき給へゞもとも　素食つかうまつりなん（後）雜二　小一條右大將よ名づき給ふとてよゝてそへて侍りける　重ゆき「そちのくのあざちのまゆゑひくやとて君わが身をまのせつるかな○注ニ名簿トヲ我性名勞ナド書テアルフダナリ（宇治拾）十一、今よりハひとへよ御弟子よなりて候ハんといひてふところより名簿ひきいでゝとらせねり（同）同　九　我をでよせめられなんぜかやうにおさてまつらんといひて忽よゑやうぶを書て文ぜさゑよむもたせてむかへてまゐらせさりけれバ守殿見てかのゑやうぶを受とらせていそかやうよゑやうぶよおこさりぶゑをそへて出をすでよきされるなりされバあがちよせむべきよあらぜ（後二年軍記）先日僕從千任丸をそーへて名符あるよー申ー件の名符定めて汝つさへたるらんをゑやかよ取出べー

補　あづき（三部抄）かうべよハあづきをいれていたゞき（和名）三、一　腦奈豆岐　頭中髓腦也

補 なつきぬ（夫）十三「夏きぬのありーながらも冬のよい妹とーねあバさむからんやい

補 なつめ（菁聞）十九 貞信公なつめをあひーてまゐりけり式部卿親王の家ゐよきなつめの木ありけり。万葉にあり

なつびきのいと（催馬樂）夏引 なつびきのしーら糸ゐ〳〵もかりありさ衣ゐおりてもきせんまーめむかれよ（古）戀四、よみ人しらず「夏引の手びきのいとをくりかへーことぞ久くともたえんとおもふゐ

な〳〵へかるおろも（万）廿四十二。陸人が歌に「さ〳〵のものさやぐ霜夜ゐ七重かる衣ゐまさるおらがそでいも（源そっね）十三此いたもりをき白たへの衣ハな〳〵へゐともゐどりかさね給ハざらん

な〳〵へのあそ（金葉）雜下 俊頼「四方の海のあそゐたバよふそくづをもな〳〵へのあそひきなもらーそ○十惡五逆の十方衆生をもらさぬ彌陀のちかひをいへり

補 な〳〵を（源玉かつら）よからぬ女どもあまたあひーりて侍るをきこーめーうとむな〳〵り（同横笛）廿 おかものーさるな〳〵りなどの給ひて

補 な〳〵わたのたま 七わた（万代）清輔「な〳〵たの玉ゐも緒をバぬくものをおもふ心をいかでとはさん

な〳〵そぢやそぢ（土佐日記）かーらもそな〳〵そぢやそぢい海にあるものありけり

な〳〵つのほー（夫）十九 成仲「逢ゐあひて日よーのそらぞのどかなるな〳〵つのそーのてらに光りゐ

○な〳〵まにかー（夫）十九 成仲「わが戀ハな〳〵まに星ゐいのりのそ人の思ひをそらゐおるなり

○補 な〳〵まにかみ。七ます神ハ日吉七社をいふ（續後拾）神祇 成久「ちぎ〳〵ていのるたのそをかけてねり七まに神の七のゆふーで（同）同、法印長舜「あもれとい七まに神もてらー見よこのーなゐもかくるこ〳〵ろを（月詣）九 成仲「よつのーなそつの位ゐのぞりなバ七まに神のおるーとおもハん○此外俊惠法師慈鎭和尚の歌ゐもあり

な〳〵つのそち（新勅）序 四方の海たつーき浪もこゑおづかゐ七つの道民の草葉もなびきよろこべり（夫）卅二「めたかおる七つの道のみつぎもの海山かけてさだめおきてき

な〳〵なぬり（い勢物）七十七段 うせ給ひてな〳〵なぬかのみわざ安祥寺ゐてーれり（狹）四、中

廿一「夢さむるあかつきがたをまちーまに七なぬかよもやゝ過よけり

補 なゝん（後）秋上 友則「けふよりやあまのかさりなん（同）秋下、よみ人しらず「たつ田川秋ゝ水あくあせをゝんあかぬもぢのながれをー

なゝくさ 正月（公事根源）十 若菜ゝ七種の物あり薺、ナヅナ、こべら、芹、セリ、菁、アヲナ、御形、ホトケノザ、すゞしろ、佛の坐あぜなり正月七日よ七種の菜羹を食ぜれゞ其人万病なし又邪氣を除く術よ侍ると見えたり

補 なゝくるま 七車（万）四「こひぐさをちから車よなゞくるまつみてこふらくわが心ゝら（狭）四、下「なゝ車つむともつきじおもふよもいふにもあまるわがおひぐさ

なゝくさのむら（万）八、卅五 山上憶良 詠秋野花「秋の野よ咲さる花をおよびをりかきのぞふれゞ七くさの花（同）同、卅六「萩のはなを花くゞ花なでーこの花をゝみへーまる藤ぢらま朝がその花

補 なゝくさや 七子（六帖）「なゝつまのさやのくちー〳〵つとひつゝこれをこのたなさーてゆくかり（神功紀）七枝刀。七ハ數多キヲ云 ナヽサヤノカタナ 七車七日七ハカリ。北邊隨筆四、廿三說アリ

なゝあめ（拾玉）二、一日百首 奥書歌「から國よ七あゆみせーさぐひとやゝ時よたらでちら

廿二 言の葉

補 なゝめ（夫）二十「月ゝぴよあまとぶかり九數えてなゝめよたてるさゝ舟もー（拾員）下「およひのゝ春やかぎりよ草まくら夕のまどよかげなゝめかり

補 なゝひまのかゆ（散木）產 夜七「君がよをなゝひこのゝゆなゝかへりいそふことをのあえざらめやゝ

補 なゝせ九よど 七瀬の淀（万）五「松浦川七瀬の淀ゝよどむともわれゝよどまぜ君をー まさむ（万代）雜三 建保御製「飛鳥川なゝせのよぞよ吹風のいさづらよのゝ行月日かな

ならもー（拾）戀四、よみ人しらず「手まくらのゝきまゝ風もさむかりき身ゝならゝーのものゝよぞありよる（新古）戀四 寂蓮「さとゝあれぬむなーきとこよあたりまで身ゝならゝー の秋風ぞ吹補（源をとめ）三 そりゝ〳〵の御とふらひあとゝ聞えならゝー給ひて○續拾其外四の句よあるゝ類句よ多く出たり

ならもーもの（古）戀一、よみ人しらず「人の身もならゝーものをあいぜーていざ心みん戀やーぬると（元真集）廿（新後拾）戀二「心をぞならもーものといふあれどかた時のまもえやいこをるゝ（和泉式部集）一（万代）戀四 いとかくつらきをも知らでなむたのむといひをる人よ「心をゞならもーものぞあるよりゝいざつらゝらむ思ひーるやと

ならいぬ（源帚木）四十 あながちなるすきごゝろいさゝまならいぬを（同うつせみ）一
初 されいかく人よくまれてもならいぬを（古）春上貫之「ことしより春をりそむる櫻
花ちるといふあといならいざらなん
ならいに（源紅葉賀）十二 男君いかでかいとさしもとならいい給ふ御心のへざてども
あるべし（同をとめ）三 をり〳〵の御とぶらひなどいかゞ聞えならいし給ひて（同花の
えん）九 今いとようならいされて（同みをつくし）卅五 この時のまも立なれ奉り
給いでならいし奉り給ひて

補 ならのもがしは（後拾）夏 好忠「さか木をるうづきになれば神山のならのもがしは
もとつ葉もなし（新後）冬、後久我太政大臣「あられふる音をさびしき御狩ぞの交野のこの
ならのもりしは

ならのおそんとき（古）序 奈良の御時よりぞひろまりよける 云々かの御時ゐ云々柿
本人丸なん云々

ならのえこのど（古）秋下「龍田川もみぢみだれてながるめり云々左注此歌いならの帝
の御歌なりとなん申ば（皇年代暑記）平城天皇延暦廿五年五月十八日即位天長元年
七月五日崩号奈良帝 是平城之謂也

ならのみやこ（詞花）春、いせ大輔「いよ〳〵へのならの都の八重さくらけふ九重ゝゐやひ
ぬるかな（万）六、四十二「くれなゐのよふかくそみよし心このも寧樂（ナラ）の京師（ミヤコ）よ年の經ぬべき
この外の卷にも多し ○元明、元正、聖武、孝謙、廢帝、稱德、光仁、右七世の都也、和銅、靈龜、養老、
神龜、天平、勝寶、寶字、神護、景雲、寶龜、天應、以上七十四年ノ間ヲ平城（ナラノミカド）朝廷ト申ナリ
ならの帝とゝ五十一代大同の天子平城天皇を申奉る

ならく（寶物集）二、十六 高岳親王「いふならくなるそこまでいりぬれば刹利（セツリ）も首陀（スダ）もか
いらざりけり○刹利ゝ天子のこと首陀ゝ乞食とも云ふ天竺の梵語あり

ならふ ひ。（源東や）五 マナブ コイフ 琴琵琶の師とてゝ内教坊のつとりよりむかへとりつ
つならいに（同とゝきゝ）廿九 そのものを師とてゝなんつづかるまでゝをれ文つくる
まとならひ侍りしかゞ（同）卅一 わざとならひまねびも（同わかな）下、卅九 我心よあ
くべきのぎりなくならひとらんことゝいいとのさけれど（同をとめ）卅七 舞ならいしを
どゝ里よていとようしたてゝ（同桐つぼ）廿三 そち〳〵のさえをならいせ給ふ（神代
紀）上、見而學（ナラヒ）之

ならふ ならひ（狹）二、下廿九。帝出家サガヘオハセヲ宮ゝとしろの御ならひの名殘を
ういとゞくおぼしめされて（源椎か本）三 宮ゝならひ給ゝぬ御ありきよなやまし く

おやされて(狹)一、上、アヤメ引タルシ　あらひよ て候へべさたりのものゝなど(源かけろふ)二、。右近の心　をさなりーそどよりつゆ心おかゝくるーとおもひ候ゝん(源ゝ男ノコト

れ奉ることおくちりをりへたてなくてならひたる よ今ゝかぎりのみちよーもこ

れをおくらかーけーきをた よ見せ給ゝざりけるがつらきおとゝおもふよ(同夕か

ゃ)廿　らべのなごのおるきりぎりにた よまどほ よ聞ならひ給へる御耳おさーあてた

るやうよおきみたるゝを(同桐つゃ)十五　内さたりを朝夕よならひていとさうぐーく(同手ならひ)廿四　袴をひもた色よならひさるよや光りも見えぎ黒きぞ(狹)二、下五十九

物おやえて後木葉より外よ身にもよせなさふらゝんもいとかたとけなく侍るべーとて(源東や)五十四　秋ふかくなりゆくころ

ならひよーおとなれゞねざめ〳〵よものこそれせぎ(いせ物)卅八段　「君によりおも

ひならひぬ世のなりの人ゝまれをや戀といふらん(源やとり木)五十六　むかーよりさ

まことなるたのもーん よならひきて

ならぶ　並(仁徳紀)十二　奈良倍豆毛餓毛(源帚木)十八　そもあーおとなびんにそへて又ならぶ人なくあるべき(同桐つゃ)四　この御匂ひにゝならび給ふべくもあらざりけれゞ

(同)十七　朝夕のことくさにもねをならべ枝そかゝさんとちぎらせ給ひーよ(万)五、五

ほとりのふさりならびゐたらひー(源紅葉賀)初　さちならびてゝ花のかたゝからのそやま木なり

○ならびなーく(源紅葉賀)十五　ならびなきぞちゝけよよひ給へるよこそゝ(同繪合)十三　面白き事ども猶ならびなーといふ

ならぶ　令レ鳴　なる　ノ下ニ出ス

ならぶ　砂子(枕)七、十九　てよゝ云々かんもりづかさのものゝ疊とるやおそきとのもりづかさの官人ぞも手おとよ箒とりをなでならぶ

ならぶ　令レ馴(源末つむ)廿九　つかひならーへ給へれゞめーなきときも聞ゆべきおとあるをりゝまうのやりをり(同ゝゆき)廿六　あざらかよやうぐ〳〵人めをもならぶなんよきことよ侍るべき(小大君)十二(後拾)釋歌　「道ーをやおぞろの髪よあらされてつもれるがでと草枕なれ(後)夏、よみ人(中務)十七　「色かへぬ花たちなよそゝぎ千代をかたらふ(中)そならせるこゑ聞ゆなり(源さかき)廿三　れいもゝちかくならさせ給ふ人をくなけれゞ(古)物名貫之　「小ぐら山ゝねたちならーし鳴鹿のへよけん秋をおる人ぞなき(後)春中、よみ人しらす　「吹風をならーの山れさくら花のぞれくぞ見るちらゞとおもへゞ(後)雑二(大和物)二　「ゐがやぞをいつならーてかならん葉をならーがそよゝをりよおもそる

（源夕がを）六ありつる扇御覽ぜれバもてあらーさるうつり香（同空せみ）二人がよ
ゐめるを身ちかくならーつゝ見る給へり（同ゐかし）九月でろおどろひても聞なら
さゞりつらんとくやーうおぞさる（同をとめ）十窓の螢をむつび枝の雪をあらー給
ふ心さーのすぐれたるさまを（同わかき）下百十二月ゐりゐけり十よ日とさためて
まひどもならーとのゝうちゆすりてのゝーる
○あらーそむる（中務集）卅琴をかりて「年をへて音ゐ聞つるおとれねを手おなら
ーつる秋ぞうれーき、返ー「音おれみ聞けるおとゐおとれをやあらーそむるに秋の
そふらん
○あらにあふぎ（新古）秋上、式子内親王「うさゝゝねの朝夕の袖ゐかゝるありあらに扇の秋
の初かせ（同）同相摸「手もさゆくあらにあふぎのおきところをるはかりゐ秋うせ
ぞふく
あらに 實ナドチナ ある ノ下ニ附ス ラスヿ也
なん テコチハノ ある ん あり（うつゑ櫻の上）上、四十
やうゐあるべき（源帚木）廿一其方もぐーてうるさくあん侍りーとて（後）雜一ひたゝれ
こひゐつかゝーれるうらなんなき云々（枕）十二、廿一。僧詞いとおふねき御物のねゐ

侍るめるをたゆませ給ゝざらんあんよく侍るべき（帚草紙）一、十三好忠「我せこゞ袖白
たへの花の色をこれなん梅とけふぞおりぬる
あん 宣長云末チカ ケテ云 ある ん也（源玉葛）十四おひきあん ゐ何事もゆづりてん（同）卅二侍らぎおりなん後ゐもかぎまへさせたまへ（つれ
つれ）百四段大ーのた何もめづらーくありゞたき物ゝよからね人のもて興ぜる物おり
さやうの物おくてありあん（源夕かは）卅九烟ゐさぐひてゐたひ參りなんといふ（同）四十山里ゐうつろひなんとおゞーたりーを（同）四十八あゝれにいふろひおからぎゝ
見え奉りてやそあんと思ふおりけり（同薄雲）廿八今をこーれよゝひかさおり侍りあ
ゝのどかなる行ひゐもり侍りあんと思ひ給ふる 補（大和物）百四十三段世中心うーあ
ゐ男せ下おぎいひけるものあん此をとこゐやう〳〵おもひやつきなん（後拾）戀一頼光
「かくあんとあまのいさり火ほのめかせ磯べの波のをりもよゝらバ（家持集）「ゐ
ろ髪ゐさーまどゝせる花のいろをそれなん梅と人ゝゐかあん（古）物名忠岑「たもとよ
りもあれて玉をつゝまめやあれなんそれとうつせ見んゝー（新葉）戀二、よみ人しらす「せめ
てたゞ身をもあれ行ゐがさまもあれあんそれとーられたゐせよ
なん 願ノ心ノ（源よもきふ）四いとかう物おそろーのらぬ御をまひよおゞーうつろ

ハなん(同)九　もえいづる春ヨあひ給ハなんとねんごわたりつれど(同)十さもあひ給ハなん(同須磨)四十「山かづのいほりヨたけるおを〳〵もことひおなんこふる里人(後)雑三小町「岩のうへまたびねをそれごいとさむー苦ゖ衣をそれヨかさなん(源夕かゃ)卅九もやかへらせ給ひなん(同若紫)七もやかへらせ給ふなんコレラハ給ハナンカ(同夕ゥは)卅一惟光とくまゐらなんとおぼゆー(同)卅三もや御馬ヨて二條院へおハーまさなん(同わか紫)十六えやまの苔ヨくらべざらなん(同まはろし)十六花橘の月かげヨいときえやかヨ見ゆるかそりも追風のなつのーけれご千代をおらせるこおもせなんとまたるゝほどヨ(枕)五、廿人もあハなんと思ふヨ更ヨあやーき法師あやーけいふかひなき物のみたまさかに見ゆるいと口をー(伊勢物)六段もや夜もあけなんと思ひつゝゐさりけり(六帖)四(拾)戀五、よみ「數ならぬ身ハ心ざヨなからなん思ひおらるべく(拾)八しらすぜハうらえざらまー。願ノなんハやナドノカ、リハナキ例ナリ補(大和物)二「いかまーてわれハきえなん白露のかへりて後のもゝれハおもゝど

なん宣長云なんニ三ツの差別アリ末ヲカケテ云なんカケテ云なん是ナリ末ヲカケテ云なんトハ(古)春下、そう「いざ櫻これもちりなんひとさくり法師りなごん人ヨうきめ見えなん、上ハ我もちらウト末ヲカケテ云ヒ下ハうきめ見えるでアラウト末ヲカケテ云リ此格イト多シ願フ心ノなんトハゆかなんこさなんたさなんきなんいそなんやまなんあらなんナリ證歌いと多ー又エケセテチヘメレ等ヨリツヾキテ願ふ心ヨなるもあり

エ(古)雑下「人おれぜ思ふ心ハ春霞さち出て君ゲめヨも見えなん
ケ(同)戀一「春たてゞ消る氷の殘りなく君ゲ心ハそれヨとけなん
セ(後)戀六「白雲ゎ行べき山も定まらぜ思ふ方ヨも風ハよせなん
テ(同)別「此度も我を忘れぬ物ならゞ打見ん度ヨ思ひいでなん
ヘ(同)賀「年の數積んとぞおる重荷ヨハいとゞこ附をこりも添なん
メ(後拾)春「鴈かねぞけふ歸るおる小山田の苗代水の引もとめなん
レ(金葉)別「戀ーさハ其人數ヨあらねども都を忍ぶうちヨいれなん

補(玉箒)ヨ云○そゆるめていふなんこれハ詞書ヨおゝーおをらく古今集の中ヨて一ッ二ッいとゞ序ヨ赤人ハ人丸ゲ下ヨたゝんん事かさくなんありける、貫之詞書ゟく
さたかヨなんやそりハある、秋下敏行朝臣歌の注ヨ此歌ハまた殿上ゆるされざりれる時ヨめーあゲられてつかうまつるとなん、羇旅かり平朝臣歌の詞書ヨおれなん都鳥といひけるをきゝて此類物語などもいと多ー云々下の留りぞヨ同ゞ此なん歌

ふ古今物名うつせみ「たもとよりたまをつゝまめやこれおんそれとうつせ見んら

おん（とりゝへ）二、十あたらいをどうおいをるひとを人ともせを物遠く上をめき給へるおとそれをかりそめなんおもひ聞えたりつるを（源帚木）廿八なんをべくさゝひまをぬ人ゝ（同）十おれをもとめのおんとをべー（同ゝふひ）卅六あまりれなんもいできけり

○**なんつくる**（源野わき）十五そのをかゝつゆおんつくべくもあらを（同ゝさる）十三人の上をおんつけおとーめざまのことゝいふ人をゞ（同帚木）四女のこれゝーもとおんつくまでゝきゝかたくもあるかなと云々

○**おんなく**造作モナキ之（源帚木）十五おんなくー出ることおん

○**おんぎ**（續古）釋教初て卅講行ひ侍りける聽聞ふ云々なんぎの出來りけるを增弁法師をその内へこれゝいかゞと尋たりゞれゞ（枕）十一、なんぎの事をいひてその事させんとをといもんといふをと文字を失ひて只いもんぎる里へ出んぎるなどいへゞやがていとところー

補 **おんどき**（宇治拾）十一、九さゞ今ゝなん時をといふ

なんぢ 汝（竹取）七、大納言詞此國の海山よりたつゝおりのをる物かりいかゞおもひてゝ汝らかさゝ物と申べき（同）八なんぢらよくもてこをりぬ龍ゝをる神のるゝおまをありけれ（同）十、御門詞汝ゞ持て侍るゝくや姫奉れ（空穗たゞこそ）廿一。父君詞もゝゝのつゝゝものーて親をいるともなんぢゞとゞといひさゝり給へるを（源かしゝ木）卅おんぢが父ゝともいさめをほーうおほーれんかー（白樂天）勿頑ニ愚似汝爺ヿ

なんでふ（竹とり）おんでふおゝちをれゞかくものをおもひさるさまて月を見給ふぞ（宇治拾）三、十ものゝつき給へるのといひけれゞおんでふものゝつくべきぞ（竹とり）此世の人ゝ男ゝ女にあふ事をを云々かくやひめのいもくなんでふさる事か侍らんといへゞ補（空穗樓の上）四十おんでふことも侍らぎ

○**なでふ** カナノ順ニ出ス

おむあみだ（拾）哀傷空也ぬゝおーー（新古）釋教法圓「ひとさびもおむあをた佛といふ人のもちをのうへゝのゞらがな「おむあをた佛の御手ゝかくるいとのをもりをたれぬ心ともを

おゐ 地震（榮松のしづえ）十四おゐおどおとろ〳〵ーくふりてむづかーゝころそひお

り（空穂　樓の上）上、七　ありつるよりもこゑのひゞき高くまさりて神いとさとがしく
ひらめきてあるのやうゝ土うでく（武烈紀）二　「おそのおのやぶのおそかきおそと
よみなるがよりこゞやれんおゞがき補（定頼集）十月ぞりよるあるのいたくふり
けれゞ「梢よゝ殘りもあらじ神無月なべてふりつる夜ものくれある
なのり　体、語（著聞）十六、四　御一家ゝみな隆の字を名のらせ給へゞいへさうとやつけ
まるらせらるべく候らんとゆゝしくむからひ申さりげよていふを云々　殿の御名の
りそゞかりうとこそおりまるらせて候へ（頼政集）上、十四　「まちれりとこれもや聞ん
ゐとゝぎすなかのりそゞ名のりをし給ゝで（源タかを）十五　これも名のりをし給ゝで
（同花のえん）六　猶名のりし給へいかでか聞ゆべき（同はたる）廿五　もしさやうなる名
のりそる人あらゞ耳とゞめよ（同東や）卅七　されぞ名のりこそゆかしけれ
なのり　る（榮さま〳〵）一　殿の御娘と名のり給ふ人ありけり殿の御こゝちよもさも
やとおぼしけれ人まるり給ひて宮の宣旨よあり給ひぬ（宇治拾）二、九　御讀經の童子に
むべると名のるさ名のられて（万）十八、十九　「卯の花のさくよしなけゞゐとゝぎにいや
めづらしも名のりなくなべ補（万）十八、十七　「あかときよなのりなくなるゐとゝきにい
やめづらしくおもゐゆるかも（後拾）夏、備前典侍　「ほとゝぎになのりしてこそしらるか
れ尋ねぬひとよつぶやもらまし（万）九、あよゐがさしそひよいでゝ玉藻ろる海未通
女どもなが名のらさね（夫）十一　雅經　「あさくらやきのまる殿よ誰とへゞ秋をもおのる
荻の上風（万代）夏、元方　「立かへりたがとへゞかも子規おのが名をのそなのるおるら
ん（月詣）四、盛方　「行ちがふさそられどきの雲路よてかたそよおのるほとゝぎにかな
（同）同、季貞　「そかきもりまてかふほどゝ時鳥おそし雲ゐよ名のりしてゆけ（延喜衛
門式）云凡黄昏之後出入内裏五位已上稱名六位已下稱姓名然後聽之
なのりそ（允恭紀）九、十一　年衣通姫歌曰「とこしべよ君もあゐやもいさおとり海の
濵藻のよるとき〳〵を時天皇謂衣通姫曰是歌不可聆他人皇后聞必大恨故時人号濵
藻謂奈能利曾毛〇莫告藻ナリ神馬藻ナリ（万）三、卅四　「そさでゐるあらいそよおふる
おのりそのおのりいつぶよおやゐおるとも（催馬樂）伊勢　「いせの海のきよけなぎ
さよおそゞひよおのりそやつまんかひやひろゐん玉やひろゐん（後拾）雜二、成章　「いそ
ある人ゐあまたよ聞ゆるをさがおのりそをりてあさへん
なのめ　宣長云俗にたいが（源わかな）下、三　いあるといふ意そ
まそゆくかゝる心ゐあるべき物かなのめあらんよてだおけしからぎ人にてんつか
るべきふるまひいさせじとおもふものをましておそれおき事と思ひこびてゐ（同

帚木）十三 あのめまうつろふ方あらん人を恨えてけーきをえそむかんもたをあがまーくりなん（同）十八 ゆくさ先あがく見えんと思へべつらき事ありともねんごてあのめまおもひありてこのへる心だまうせなべ（同そし姫）十三 あさり此御使をさきまたてかの宮まるりぬあのめあるきへのさるべき人の使だま稀なる山かぜまいとめづらーく（同わかな）下、四十 あどうあのめまて猶この道をかよへーあるたのりのたーをべをりおかざらん（同夢の浮橋し）九 かべかり聞てあのめま思ひをぐれべく侍らざりー人なるを（同若紫）廿八 心ふかうをづかーげなる御もてなーなどのあや人に似させ給へぬをなぜどあのめなる事だま打まどり給へざりねんとつらうさへぞおべさるへ（同帚木）十七 とあれべくりあふさきるさまてあのめまさてもありぬべき人のをくおきを（同夕かを）十一 六條ごたりにもとねがたのりー御ねーきをおもむね聞え給ひてのちひきこのへーあのめあらんいいとやーかー（同）十七 おひまどへーてあのめま思ひなーつべくいたべかべのりのすさびまてもをぎぬべきをさらまさて過ーてんとおやされぜ（同あふひ）十 姫君へ年比聞えごたり給ふ御こへろをへの世の人まにぬをなのめあらんまてだまありまーてのうーもいかでと御心とまりける（同）廿八 御ござのいそぎあどせさせ給ふもおやしーかけざりーことなれべつきせをいとど

うあんなのめまかさをなるそざま人の親へいかべおもふめるまーてことわりあり（枕）四、十一 まことまごろからんへせうとの爲もごろかるべーと思ひーまあらぜそこらの人のをめかんでて云々（紫日記）思ふ事のあのめある身あらまーのべをきーくもてあーごこのやぎて常あき事を見きくまつけてもさべ思ひかけたりー心のひくかさのみつよくて物うくおもへぜまなげうーや事のまさるぞいとくるーき（發心）四、十日まそへてよわりゆく五 を云々いとあさまーくおろかにもあるかなとみれどあのめあるほどの人そそべかりていひ出ぜ十日ごろありてまめやかまおもくなりぬるのち（源わかな）上、九よ十四 ろづの事あのめまめやをくなれべいとあんおもひおくうれーき（同わけまき）四十九 かくあたらーき御ありさまそあのめあるきへの人の見奉り給へまーかべいのみ口そーからまー補（榮月のえん）そでめよりあのめまてなかくーさまよくおむーまに（源まきごしら）八 めづらーう御心うつるりさのあのめまだにあらぜ人まそくれ給へる御ありさまよりも（同常夏）十四 あのめまもまろさきぞよつかぜむづかーき御のさらひなりねる

あのめならぬ ず（源若菜）上、四十二 ありくーてのくよの聞耳もあのめならぬ事の出來

ぬるよ（同）同九十五　宮の御方うへの御ら一づきのえめでたくてゐたり給ふ事もえあ
のめからざるいかさまにかはきこえさせめりかし（盛衰）十九、心うき事かなとあのめあ
らぎ歎れるぞ（濱松）四、卅三　まの人の御哀れいとゞまさり心ぐるしさもあのめからぎ
（源 榊）廿七　院のおぼしの給わせ一さまのあのめからざり一をおぼし出るさもよろづ
の事あり一にもあらぎりたりゆく世にこそあめれ（著聞）十六、十二　其近邊さ事なのめあ
らぎ人くふ犬あり（狹）四、上　このくのえなのめからぬありさまを（同）をこしもあのめあ
らんさといいえどうえづら一ぞなる御ありさまこそ（同）下かさ〳〵さつけつゝ
あのめからぎおぼしおらるゝものから（源よもぎふ）廿五　何でともあのめたてあら
ぬ御ありさまをものめかし一いで給ふわ（同野分）十九　北のおとゞのおぼえをおもふよ
をおし一あのめるこゝちし一てかき給ふ

なのえ一て（拾）雜下（朗）貫之「名のえ一てやまわみかさもあのりけりあさひ夕日の
さををいふらも（同）同、よみ人しらず「あのみし一てなれるもみえぎ梅津川ゐせきの水ももも
れバかりけり

あぐ［ぎ］和（古）戀五　友則「雲もあくなぎたる朝のそらなれやいとゞれてのみ世をバへぬ
らん（六）一「くももあくなぎさるあさのてる日にておもわれまさるこれやあよな

り（万）六、十、長歌　まつほのうらの朝なぎよもーはやきつゝ
（實方集）「このぎならぬ世をうきふねのよるべなえひぐきのあぐをこそまて
○風吹て浪たゝぬをなぎといふ常の所よも風の吹やむをなぐといふ補（万）十七、四
十八
「あまざかるひなともしるくおゝざくもをゞきこひかもおぐる日もおく
○かでりりつる　カナノ順ニ出ス
○なでむ　同
○なぎぬ　同
なく　無［あし］ノ所ニ出ス
○なかりつ（源夕がほ）卅二　さることもあかりつとてあ給ふさま
なく　投（源末つむ）卅二　くやきのふのかへりでとあやーく心をえをぐさるゝとてあ
け給へり（いせ物）六十五段　つとめてとのもづこのさの見るよ昏ゝとりておくよあゞいれ
てのぞりぬ補（源梅かえ）十五　さらよ筆あゞすつべーやとねたかり給ふ（宇治拾）一、廿七
狐身をあゞてよぐれどもおひせめられてえ逃ぎ（落くぼ）一　はらたちてなゞかれて
立給ふよ（うつぼ國讓）下、廿三　此ふえなげ出ー給へれバ
なく［き］泣（万）十一、十五　「さきもこが我をおくると白さへの袖ひづまでよなきーおもや

も（源紅葉賀）廿三 今さらなる身の耻よおんとておくさまいといみト（宇治拾）二、十ぬむかりようらそのゝーることりぎりおー（同若紫）四十二 心やそーとおもひてない給へゝ（同帚木）四十二 泣さまなどいとあれなりき（同さかき）四十一 宮のうちゆそりてきこちたり（同末つむ）十四 古のことのさりいでゝ打泣なそー給ふ

○おく〳〵（源桐つぼ）六 母君なく〳〵奏ーてまりでさせ給ふ（いせ物）四段 おく〳〵かへりよけり（源桐つぼ）七 よろづの事をなく〳〵ちぎりの給ゝすれそ 補（同かしゝ木）九 おく〳〵るざりいり給ひぬれゝ

○なくなそざ（拾）戀五、善祐法師母 「おくなそざ世ゝそうそとありおゝんおなどおぎさよながれよるべく

○おきー ノ類カナノ順ニ出ス

おく 啼（源帚木）四十二 鳥もおひぬ（同）四十三 鳥もおゝ〳〵なくゐ

○おきろへる おきおきりて カナノ順ニ出ス

おくなる 死（榮衣の珠）三 男君よてやがておくありてうまれ給へるを（源夕かほ）四十七 右近ゝおくなりわげこ御めのとのそて置て侍りれゝ（同桐つぼ）十三 故大納言今ゝとなるまで云々これおくなりぬとて

○なくゝおく（源さわらび）十八 年でろ人ーれぬものよおもひれん人をもおくなーてもの心細くながめる給ふをる（後）哀傷 人をおくおーてかぎりなくこひて、

○おくて（源桐つぼ）九 うへの女房などもの戀おのびあへりなくてそといのゝるをりよやと見えたり（同若紫）二 世よおくて久ーくなり侍りぬれゝえおろーめさゝ

補 なくゝおく（弁乳母集）「春の田をまかせる人のおくゝなくかへれ〳〵も花をこそめ

補 おくそー（万）三一、廿 名細（ナグハシ）よーのゝ山ゝ

おくよ（堀次）星 忠房 「ゆふづゝのおどてまだきよ人ぬらんねよてふかねの音もせなくよ（古）春上よみ人しらず 「こやまよゝ松の雪ざにきえおくよみやこいのべのとかなつそけり（同）賀、去げる 「つるのめもちとせのれちゝおらなくおあかぬ心よまかせてて（同）春下、よみ人しらず 「春雨よにはへるいろもあかおくにらさへおつかー山吹のそを（同）同よみ人しらず 「山吹ゝあやおゝ咲そ花そんとうおけん君がこよひこおくよ（同）戀四 「ちゞれいろよつろふらめどおらなくよ心ー秋のもみぢおらねゝ（同）春下 「櫻むおちらゞ散らおんちらぎとてふるさと人のきても見なくよ（同）戀四 「あまのそむさとのおるべにあらなくにうらそんとのそ人のいふらん（同）賀友

小町

則「めづらしきあるあらなくにはとゝぎすのとーをあかぎもあるこのな(同)春下、みつね「あるしーあきさねそもなくかおうぐひそのあとしーけそちる花あらなくに(土佐日記)「白さへの波路をとゐくゆきかひてこれに似べき人いたれもあらじとおもふよ云々の歌にや補(後)戀五深養父「うつせそのむなしきからにあるまでもこれむとおもふこれあらなくに(同)春上、よみ人しらず「あとあらばをりつくしてんさくら花こがまつ人のきても見なくに(同)春中、つらき「わがやどの花になゝきそよぶまどりよぶかひありて君もおなくに(同)同貫之「ふりぬとていたくなわびそ春さめのたゞよやむべきものからなくよに(同)春下「こがやどのなゞきい春もおらなくにうくひすのかくせいなにゝか花をくらべても見ん(同)春上よみ人しらず「花さにもまざさかおくにうくひそのなく一聲をたるとおもたん(拾)雜秋人丸「わたしーもりとや舟よせよ一とせに二たびきませに君あらなくよ(古)春下元方「をしーめどもとゞまらなくに春がにをかへる道にしーさちぬとおもへば(同)雜上敬信「おそ空をてり行月しーきよければ雲かくせとお光けなくよ(同)雜上、よみ人しらず「いそのかえふるからをのゝもとくしーとゝの心いこをられなくよ(同)戀五元方「久かさのあまつ空よりもそまなくに人いよそにぞおもふべらなり(同)同素性「秋の田のいねてふことをもかけなくに(同)

あくになにをうしーとか人のかるらん(躬恒集)「をしーめどもとゞまらなくに山ざくら雪とのみこそふりてやみぬれ(古)雜下「おかりとてそむかれなくにことしーあればまづなゞかれぬあなうよれ中(同)夏千里「やどりせし花さち花もかれなくよまどの郭公こゑたえぬらん(後)春上躬恒「いづことも春の光いわのなくよまざえよしーの、山い雪ふる(兼盛集)鷹かりしーたる所「つまこふるきゞすの聲もさえなくよもかなくにふい家ぢくらしーつ(後)秋下、よみ人しらず「ひたをらよわがおもいなくよおのれさへかりとのこゑきわたるらん(拾)戀五有時「なゞきこる山ぢい人もしーらなくよわがこゝろのみつねにゆくらん(万)廿五十四「さゐ川よこほりわたれるうをらひのうはき心をこがおもむなくに(伊勢物)「をちのくのしーのぶもぢずりたれゆゑよみだれそめよしーこれからなくよ(六帖)「玉ざゝの葉さけにおれるしーらつゆのいまいくよへん我からなくよ(河社)云續後撰集「老となるつらさいしーりぬをのりとてそむかれなくよ月をそるかな古今の筐の歌をとれりをかいへることなり万葉よかやうのなくい皆不の字にして無よあらぎ定家卿のきえなくよまたやゝ山をうづむらんとよみ給へるいよくかなへり此歌いりあいぎといふべしー(万)十五、三十四「ひとくよゝきみをいませていつまでかあがこひをらむ時のしーら

あく

補 **あぐるさ**（万）十三、長歌 あぐるさのとはさかりゐて

あぐさむ 谷川云物思ヲまぎらいー慰労そるといふ万葉ニ意遣の字又名草むとかけるい義訓せー也ナクサモルとも見ゆナグサとのそもよめり歌の詞物語の類ヨもナグサメと見えてナグサミといへる例なー（枕）三、八 鳥い云々山鳥い友をこひてなくに鏡を見せられバあぐさむらんいと哀あり云々（同）十、十九 いとどくもかき事もあぐさむあるらな見つけでいたもしー えおそあぐさむまとけれ（源桐つは）廿三 むやとさるべき人々をまるらせたまへど（同）廿五 御心もなぐさむべくおぼーありて（万）四、十六 ちへのひとへもあぐさむる心もありやと（古）序 たねきものゝふの心をもあぐさむるい歌なり（源ゑふひ）四十二 若君を見奉りてこそなぐさむべかめれ（和泉式部集）上 「かたらへバあぐさむことともあるものをこれやー ん戀のまぎれヨ 補 （續拾）戀四典侍親子 「あらさりー袖かとよほふ梅がゝよおもひなぐさむ曉のそら（千載）戀三上西門院兵衛 「よひのまもまつに心やあぐさむといまこんとたよさのめおかなん（同）戀四久我内大臣 「わかれていかたみなりれり玉章をあぐさむまもりもきもおかせて（同）同攝政家丹後 「おもひねの夢ヨもあぐさむ戀なれバあそねど暮のそらぞまさるゝ（万）十八、廿九

あぐさむるまゝろーあくバ

あぐさめ（源花ちる）五 いよーへのこれがさきあぐさめまれ（榮衣の珠）卅一 されどもそれいおやーもあぐさめぬべー（源帚木）四十二 こなやー給ふ後せもやとも思ひ給へあぐさめまーを（同同）おろうならぢちぎりあぐさめ給ふまとおはかるべー（同）同あぐさめがたくうーとおもへれバ（同若紫）卅三 いさまー かゞ心ちのあーさあぐさめきとの給ひーのバ（同夕かほ）廿九 思ひあぐさめてこれをたのめ（清慎公集）「逢見ての後よももの、かあーくバあぐさめがさくありぬべきこのか（万）十、七 「こふることなぐさめかねて出もれバ山も川をもわらなぐさめうねつ更科やをすて山よてる月を見て 補 （古）序 歌をいひてぞ心をあぐさめれる（續古）雑上 知家 「いかさまよ秋のゆふべをなぐさめん世いそむけども本れ身よーて（万）十二、卅五 「ありちがたありなぐさめてゆかめども家なる妹いいぶかーみせむ（落くぼ）歌云々 こゝろあぐさめよいへどかひなー（拾）戀三よみ入しらず 「こやこよて見ーよーのそらぬ月のけをあぐさめよてもあこのにころかな（宇治拾）十四、六 よびてつれ〳〵あぐさめんとて使をやりて（拾）別爲頼 「さけくまの松を見つゝやなぐさめん君が千年ヒ陰よならひて（新千）別、禪法師必 「行末よ歸る山ぢのなりせバ何を別れの

慰めよせん（万）九、十六「なぐさめておよひいねなんあれよりいこひらもゆらむこゆゑられなば

なぐさめぐさ（源東屋）廿六命侍らんうぎりいかなるつべし

なぐさこ（新續古）夏、後小松院御製「おもふおとそよなぐさみやせん（源わか紫）十明くれのなかきさまてかたらひ聞え給へばやうく〳〵おそろしさもなぐさこて（同紅葉賀）二十姫君おこし奉り給ひて出ぎありぬと聞え給へばなぐさみておき給へり（同須磨）廿五故郷の女こひしき人々の心をなぐさこよけり（同とこ夏）十三物をもきこえてなぐさこなんや（拾玉）一「小山田の苗代水そまのいるやなげき春日の賤げなぐさこ（濱松）二、廿三の給ふさまのめでたきよろづなぐさこて（源よもきふ）四親のこりげとまりたる心ちをるふるきをそかと思ふよなぐさみてこそあれ（壬二）上「思ふこよの枕よ心あらばいひあはせてもなぐさこおまし（和泉式部集）上「むかを見て春の心もなぐさこきみぢのをりぞ物いかかまし（枕）七、廿三おもひなげかれつる心もなぐさみて〇（和訓栞）二歌の詞物語よもなぐさめと見えてなぐさこといへる例なしと書るは誤りある事をおるべし

補なぐさもる（万）九、廿三草まくらさびのうれひをなぐさ漏事もあらむと

おやらか（空穂櫻の上）下、十五いとおやらかなるうちきよ柳のおり物のうそきおり物かさねてきてる給へり

おやらふ 遣 儺 お ノ下ニ出ス 補（躬恒集）詞書おもひのつまもりのよおのおよを（拾貝）「もむれの鬼ろ人のなやらふおとよ夜は更てもはしき風よくれもつる年（恵見集）十二月おやらふ雪ふる「としでとよやらふおはしてありつるそおとしぞつひよ雪きえぬべきたよもなし

補おやう（拾玉）一「さそといそべまおとよさそとあとうちておやうやといふ人

補おやむ（後）雑一行平「このぎりおきおもひのつまのおくいこそ正木のかづらよりもおやまめ（源ゆかし）「いぶせくもおへろよものをおやむかおやよやいかよととふ人もおみ

なやまし 圧 さ げ 面倒。ナヤムトイフコヲ（源帚木）卅四ふとて（同）四十心ちおやましれば（同）卅九ん所をとの給ふ（同繪合）四、齋宮宮いなやましにおぼして御かへりいと物うく

給へそ(同夕かほ)卅物ようおそれたる人のおやまーげなるを(同若紫)廿八みやもかついとまゝろうき身ありけりとおぞーをぴくようやまーさもまさりて

なやまし(源わかし)廿おをーれそど御心をもおやまー奉るようやとおん思ひ給ふる(神代紀)下、廿四如此逼悩(ナヤマシタマヒ)則汝兄自伏(レ)補(續後撰)旅定家「なれぬ夜のたびねおやます松風ょ此里人や夢むをぶらん

なやみ(源さかき)三院のうへおどろ〳〵ーき御なやみいあらで例ならをときおやませ給へば(同わかし)卅六御めのなやみさへあのでろおもくおらせ給ひて(同わか紫)廿七藤つぼのみやなやみ給ふ事ありてまかで給へり(同紅葉賀)十三御まゝちもいとくるーくてなやみ給ふ(同わかし)卅六。孕ル 六月をこのりより心ぐるーきれーきありてなやみけり(同うす雲)十月比おやませ給へる御こゝちょ(同みのり)初そこもかとなくなやみこたりさまふことひさーくおりぬ(土佐日記)川の水ひてなやみこづらふ(源絵合)三あがちおるおとそおもひをぢめて心ぐるーくおぼーなやまれらん

○いひなやむ(狭)四、七十五。古本大やけををぢめそーり奉るべきことならねと猶いろおることゝらあらんといひなやむ人おはかるょ

○なやを(蜻蛉日記)十一、下十七きおやーたる物のいろもあらぬやうょ見ゆ

なまいまいまい(源わかる)下、八十例いなまいこれおきたそふれでとおぞも打とれきこえ給ふを

なまいとほーく(源わかな)下、卅こたるゝ所もやとなまいとをーくおぼれ

なまいどもて いどましき(大和物)六おまいどみてとき〳〵物おどいひれる人のもとより云々(源みのり)七まーて夏冬の時ょつけたるあそびさそふれょもおまいぞまーきおたの心いおのづからさちまどりもをらめど

なまいかよぞや(狭)四、下卅二さふらふ人々も内々ょいおまいかよぞやとおもひたりーかと

なまいたもり(枕)四、六おりたる人のがりなをさりにかきてやりたるょおまいたいりありともちらたちて返事もとらせで

なまもづらー(狭)四、上卅八おまもづのーとおぼーりろくさせ給いぬに

なまもらたちやをく(源東や)五十おまもらたちやをくおもひのまゝょぞをおーありれる補(宇治拾)三、二ときをかりまで出あむねばおまもらたゝうおぼえて

おまむーさなき（源わかるゝ）上、卅五 かゝる末のもよゝーまんおまむーたなきまでおもひおらるゝやりも侍りける（同夕かほ）七 御いらへもおくゝゞへねればおまむーたなきまゝにうくさざとめかゝーけれゞ

なまゝくき（源よもきふ）八 姫君の御ありさまの心ぐるーげなるもみとふらひきまえぜおゞおまゝくきことゞもいひ聞せつゝ（同はし姫）廿四 いとつゝみおくものなれさるもおまゝくきものから

おまほのそいたる（源ききとしら）三 おまかなるうーろなき人のおまゝのそいたる宮仕ゝ出たちてくるーゞゝまやあらんとぞうーろめたかりー（孟）スキーシキナリへツラヒガマシキ也

あまとくあり（狹）上、四十八 めのとかぞへの頭おどいふ物のめゝておまゝ徳ありねるゲ又おき物ゝおもひかゝーづきて

なまり（金葉）連哥 あたりける北の方ゝまおなまりたる人のものいひねるをきゝて（頼政集）下、卅七 「こちのくのかねをゞ戀てゞりおまゝーいもゲなまりのこそられぬ哉

なまりでる（蓍聞）十六、廿一 それとゞまれとなまりでるまで高聲ゝおきてけれゞ 補（宇治拾）六、十四 こなまりたるこゑゝて問ふ

補

なまる（万）十六、三十 おゝーてるおゝその小郷ゝいゝつくりなまりてをるあゝーゝゝをも哀にもおゲーいでけり

おまをこのー（源若菜）下、九 なまをゝーくも哀にもおゲーいでけり

おまをんな（空穂 藏開）下、廿四 女こそい物たをかりいをめれたをかり聞えてんやおとてこゝらひ給ふ（同 國ゆつり）下、十七 ゝゝをみゝこもりゐたるおま女のきるべきものかい（同）上、十 くゞてのふたにおま女の手まて詞云々歌云々とあるをそん王の君されにゝ例の人のをさびゝこそあめれ（源かげろふ）一 例の人いあないをるたよりもーいおま女おどーていそすることこそあれ

なまそんおゞら（源末つむ）十三 かく世にめづらーき御ねひのもり匂ひくるをゞなま女むらなどもゐみまけて

おまごろ（源帚木）廿九 無才の人なまわろおらんふるまひおどえんに

おまごかんどゝり（源夢の浮橋）八 なまごかんどゝりなどいふべき筋にやありけん

おまごづらいー（源末つむ）十三 ゝくわざとがまーうの給ひごされゞおまごづらいーく（同帚木）卅八 おまごづらいーれどうへおるきぬおーやるまでもとめつる人とおもへり

おまらたい（源手おらひ）卅三 なまかたいなる事をかくなん聞え給ふといふおり

なまかさもらいさー（源わかば）上、七いとさかりをぎ給へりやおぞなまかたいらいさく思ひ給へり

なまこのさね（源紅梅）七。琵琶ノ　なまかさはよおたるよ聞よくき物の音がら也（同みゆき）廿七　なまかさねなるおと見え給いべかうまでことごおうもてなーおやさどおぞ云々

なまよろーく（うつほ　櫻の上）下、七世の中の人もなこのごからーとおもひたるをなまよろーくてあるべきとの給へば

補　なまそんわうめく（源椎が本）六　なまそんわうめくいやーからぬ人あるたよ

なまつゝまーき（榮花山）六此女御后よをそ奉らんとの給いそれぞおとべなまつゝまーうて云々

なまねさー（和泉式部集）下かへされてなまねたう思ひねんよべいくやーかりけんろーおぞいひたる人よ（源末つむ）十此君のこのうねーきをそありき給ふをまさよさていそぐー給ひてんやとなまねさうあやしーがりけり補（同常夏）四なまねさーともりきゝ給へかーとおやになりけり（同やとり木）卅四人ーれぞなまねさーとぞおやーれる

なまゝー（源帚木）七なまゝーのかんざちめよりも非参議の三四位どもの世のおやえくちをーからぞもとのねさーいやしからぬ云々（同わかば）下、四猶かの鬼神の耳とゞめ給たうふねそめよけるものなれべよやなまゝーよまねびておもひらないぬたぐひありね（古事記）中、四十七爾稍取依其琴而那麻那麻邇控坐（源帚木）廿八なまなまのむかせもづかーう補（大和物）「君をおもひなまゝーー身をやく時いけふりおほかるものよぞありける

なまむづかー（源をとめ）卅二かうをかーき聲なれど誰ともえ思ひなされぞなまむづかーきよ補（同夕霧）六十三おぞーいなまむづかーうとづらいーきやうよもゞらるゝ事あれぞ

なまうかび（源帚木）十三にでりにおめるやどよりもなまうかびよてていかへりてあーき道よもさゞよひぬべくぞおやゆる

なまうらめーき（源紅葉賀）十八とくもとたり給いぬなまうらめーかりけれべ

なまうーろめたー（源あけまき）五十四なまうーろめたけれべ（同かけろふ）五十九人よこゑ聞すべきものとならひ給ねんとなまうーろめたー

なまおやえ（枕）八、十四女をゆおぞこそさやうの物ごにをいせね男いさもあらぞよゝ

たるうたをたまおおえなるを（源やとり木）卅五 中納言ぞの〻御せんの中よなまおそえあざやかからぬや

補 なまおきか（伊勢物）百十四段 なま翁の今いさる事よけなくおもひれれと

なまくちをー（源わかな）上、四十八 なまくちをーけれどにくからぢ見奉り給ふ

なまぐるー（源わかな）下、四十七 此宮のかくこそより物ーの給へるいなまぐるーかるべれば（狭）四、上四十 御このそうちあかめてこきいまおらせんともなまのんなるものをとてなまぐるーと覚ーさるを

なまくね〳〵ー（源紅梅）三 うるいもあらぬ心をへうちまどりなまくねー〳〵ー き事もいでくる時々あれど

なまぐさー（いさよひ日記）隣よりくゆりかゝるけふりいとむつゝーき匂ひなれば夜のやどなまぐさーといひける人の云々

なまぐらき（大和物）五 在中将もつかうまつれり御車のあさりなまぐらき折よたてりけり

なまやそからぎ（源わかむ）上、六十五 そのあつかひにと聞ーめーてだよなまやそらぢ

なまねやねー（源夕ぎり）七十八 なまねやけーとい見給へど

なまねーからぬ（枕）十二、一 見からひそる物、あくび、ちこぞも、なまけーからぬえせもの

なままゆき（源紅葉賀）廿四 内侍いなままゆけれどよくからぬ人故い

なまふせがーけ（枕）八、廿二 おはえかどいさーつやなぞといそれゞまず人のおいそれゞなどなまふせがーけよ思ひて

なまこゝろき（源竹川）四十 なま心ごろきつかうまつり人

なまこゝろづきなー（源わか紫）廿四 なまこゝろづきなひよやあらん

なまこゝろぐるーう（源わかな）廿九 なま心ぐるーうさまゝ〳〵おやーみざる

なまこゝろやまーき（源ととめ）卅四 なま心やまーきまゝ〳〵いふ

なまこゝろある（蜻蛉日記）上、十四 なまこゝろある人なぞさーあつまりてそぐろそーやえせでごろからんをたよまそきかめ（伊勢物）十八段 むかーなまこゝろある女あり

なまこゝろゆかぬ（源竹川）卅七 ひきたがへ給へるそなま心ゆのぬやうなれぞ

なまこひーき（大和物）六 京さへもなまこひーきさびのやぞあり

なまあらゝ〳〵ーき（源東や）九 前よいよび出ぬ人の何事よろいあらんとなまあらゝーきけーきなれぞ

なまあくがるゝ（源のわき）廿一　まめでゝろもなまあくがるゝこゝちに

なまさのーき（源すま）四、十八　やよひのついたちに出來さる己の日云々なふおんーのくおやそことある人ゝそそぎー給ふべきとあまさらーき人の聞ゆれバ（井蛙抄）六、十五　○柿本栗本ノ所宗行「心あーとゝの給へど耳ーあれバきゝさふらふぞ峯の松風と返歌を詠ドれり耳ーあれバがなまさかーきぞと上皇勅定ありて

なまさまあーう（榮花山）十一　なまさまあーう心えぬおとおがすべかめれ

なまさふらひ（宇治拾）六、七　人のもとゟ宮づかへーてあるなま侍ありけり

なまきんぢち（禁秘抄）下、五　成海房官法師也成海父生公達也

なまゆかむ（源わかあ）下初　院の御ためなまゆがむ心やそひたらん

なまめとまる（源よこ笛）十七　なまめとまる心もそひてみれバにやまあこるあそ

なまめかる（忠見集）二　「こゆるぎのあまゝいあさりゟやつれつゝいかある時ゟあまめかるらん

なまめかーき（源桐つぼ）廿一　今よりなまめかーうもづかーゞゟ（同わかな）上、八十八　御額髪のやうゝぬれゆく御そをめあてゟなまめかーき（同同）八十六　さるおそろーきおとをー給へれバをこーおもやせをそりていそどうなまめかーきめかるらん

なまめきそがた（源わかあ）下、廿三　女御の君ゝおなどやうある御なまめきそがたの今少ー匂ひくゝゝりて

なまそやゝら（狹）三、下十九　なま宮そらゟてうーろむる人なからんよりゝ大將ゟまかせたらんに

御さまー給へり（同同）七十四　いとなまめかーくきよらゟて（つれゝゝ）廿四段　すべて神の社おそをてがたくなまめーきものなれや

なまめく（源紅葉賀）廿二　此内侍常よりもきよゞゟやうざいかーらつきなまめきて（同帚木）廿三　あがらーゟふきあいをめる云々とあまめきかをそゟ（伊勢物）卅九段　此車を女車と見てよりきてとかくなまめくあひだゟ（同）初段　その里ゟいとなまめいさる女そらゟをけり（源帚木）四十三　打なき給ふ御けーきいとなまめきたり（古）俳諧　遍昭「秋の野になまめきたてる女郎花あかーがまー花も一時（伊勢物）四十三段　そのこ女をおやーめーていとのーこくめぐそつかう給ひけるを（源わか紫）四十四　ひたちにゝ田をこそつくれといふ歌を聲ゝいとなまめきてありけるびる給へり（同帚木）四十五　此子ゐて參れりこまやかゟをかーとゝおれどなまめきたるさまーて

まそやづかへ（伊勢物）八十六段　此男まそやづのへーけれバそれをたよりにて衛府のをけどもあつまり來にけり

まそおぞく（蜻蛉日記）中、下　又の日まそおぞくざつ人とふらひに物ーたり（狹）一、下七

うせぬー母のなまそおぞくも高きまゝらひーて（檜垣嫗集）せんなる人の妻いなまーぞくなるよ

まそおめり（うつゝ　初秋）下、六　其日御ぐしをまーゝーのねてゐ給へるなり云々　御ぐーのなまーめりさる云々

まゝひ　懲（万）四、卅、三　「物おもふと人にみえじとなまゝひおゝ常よおもへりありぞかねつる（著聞）十六、五　まゐるべきよーー仰出されけれバなまゝひよびんらさあげて（躬恒集）卅四　「あら玉の年の四とせをなまゝひ身をもてがたきこゝろびつゝゝもへぬ（發心）四、八　かさねさる仰いなみがさくてなまゝひよまかりける道よ（著聞）二十　大炊御門云々をゝなへーの織物ひとへをなまゝひよ打かれられる（白文）十四、二　強能（ナマシヒニノ）騎馬云々（發心）一、十四　時の后の宮の戒師よめーけれバなまゝひよ參りて（源わかな）下、八　百數ならぬ身よて及びがたき御なからひよなまゝひよゆるされ奉りて補（著聞）十二、十六　のがるゝかさなくてなまゝひにまゐりぬ

なまひとごろく（源帚木）廿　なま人ごろくつめくはるれど

なまもの（源玉葛）卅三　かやうの所よいよかからぬなまもの

なまものゝゆゑ（源よもぎふ）四　なまものゝゆゑらんとおもへるひとさるものえうゞて

なまものうく（源わかな）下、初　なま物うくをぐろもーれぞ

補 **なまを**（散木）「秋風よそゝきのなまをに思ひいでゝゆきけな人のこゝちこそすれ

なまをぎりやう（源よもぎふ）廿五　ことあることなきなまをぎりやうなどより

なまをさまゝどう（源椎か本）初　宮なまをさまゝとおゞーたるよ

なげ（源若紫）卅六　らくかさゝどなきあゞの御ことゝれもいのちの御心もたとり聞えさせぎいとうれーう（同かしわ木）三　なゞの哀れをものけ給ふ人あらんそこそいひとつおもひよもえぬるをるーよいせめ（狹）三、中十二　心より外よなげのあれもかくる人のあらんそりよや（源匂宮）十四　もかなくなげの詞をちらー給ふあたりも（濱松）三、一　と人がらいくちをーぢきいよいあらざりけるよやなゞの老人ともえゝぎ（源夕顔）十一　なゞの筆づかひよ（同よもぎふ）廿五　なゞの御をさびよてもおーなべたるよのつねのをゞめとゞめゝゝざて給いぎ（六帖）五、下　「立田山なげのもみぢもあるものをなき

名をさへもながらつるかな（古）春下　素性「いざさらばわかげの花の陰かれ（小大君集）十六「おくなれば心ことよあくがれねたま（兼盛集）十五「おとの葉をあだなるものとおもひせばなよかれ人のつらくもあらん（後）戀四、よを人しらす「ことのもいなげなるものといひながらおもぬさめよ君もおるらん（源椎か本）九あだのいらへをさにもせさせたまへ（六帖）四「あれをばなげのおとばといひながらおもへぬ人よかくるものかれ（うつゝ祭の使）十六「まとるをる千とせのうばのうれしきもるともあだのまつのかげかれ（源やとり木）十五あだのをさよ物をもいひふれ補（續後拾）戀三女の返でともせさりれればなげかるものをといふおとも有をとて兼盛「ことの葉のおなるものと云々（續後）春下　信實「今はまよ花のかだともさのまれぜくれなばあだの春の日うぜよ（源わかな）上　なげの哀をもうけ一言の心よせあるれおそろけのことにもあらぜ（弁乳母集）「春でとよ花かりせばこれよ君あだのあれもうけぜやあらまし（續千）春下　山階入道左大臣「いかよしてををしへとばめむ櫻花ちりなばあだの春の日數を（風雅）戀四覺譽　法親王「かもりたつ心と見ゆるそのうへのあだのなげのおさけよよしやいつまで（散木）人のもとよりこかれをおくりて侍るかへりでとよ「たぐひなき心ひろさをかさみよてあだのをされをつくてける哉（續古）戀二、後成女「かれて猶たのむもかなし玉のをのあもぜばあだの契をかりわ（玉葉）戀三「おはさりのなだのおされをたのまぜれよしおきものれおもむざらまし（同）戀五「うもるうへのあだの情れよしやきかどさらよ心のこざるべもうし（李花）「野べとれこ歸るさまよもこのりもかむくれなばあだの草まくらかれ

あだのおろう（源桐つぼ）卅二かへるとおろよおもふやうならん人ををおてもまばやとのこあだのろおろう（同あふひ）十、云々とおもれこ八

あだなく　き（神代紀）下、廿六彷徨嗟嘆（タヽズミナゲキマス）（源夕がほ）四十一内よも聞しめしなだくおとかぎりなし（後）戀六、よみ人しらす「いかよしてあとかさらんほとゝぎにあだなきの下になけばかひなし（大和物）二「あだなきのこおだきこ山のほとゝぎにあだくれるてもねそのみぞなく（源須磨）卅「あまだつむなげきの中こおれていつまですまのうらとあがめん（六帖）二「かたときもみねば戀しき大江山あだきこらをる人れよきうれ（源夕がほ）四おこたりがたく物せらるゝそやをうらぜなだきこたりつるよ（伊勢物）廿九段「もあよあかぬあだきれいつもせしかでもれふのこよひよ似るときれなし（源わけまき）九十三人のをるらんもいと人ころくてあだきあしし給ふ（好忠集）七月終

「あれハありとなゞくのよそゝ見ー人の秋風ふけバそれぞ戀ーき（源夕かほ）五十
うおゞーあげかにをかりありねんすくせのたかさよ補（万）七「あげきをバ人ーりぬべゝ山川のたぎつこゝろをせゝへたるかも
なゞく〳〵（狹）四廿あさまーく打とゞ給へりつる物をおどなゞく〳〵うちふーぬ
あげき〳〵（千載）冬公光「さりとゝもとなげき〳〵て過ー つる年もこよひゝ暮そてにけり
なげきぐさ（源梅か枝）十九いみゞき御あげきぐさかる（同藤のうらゝ）廿二朝夕の御あけきぐさなり
あげー（沙石）六下廿ひとあゞーさがりさる（源夕がほ）廿九あゞーにもえのゞらぎ（同帚木）卅九あげーのおもゝ人々ふしー て（同さかき）五ゝゝぎかりハひきくてなげーにおーりゝりて（和名）十八長押和名奈介之（盛衰）十七祇王祇女ゞバあげー落さるひろびさーゝゝそゝられたり（吉記）承安四年二月云々長押下（大鏡）六三あゞーをおりゞづらハせ給ひて（十訓）二十一間上長押をうさざりけり（枕）四八參りざれバ云々なゞーのおもゝ火ちかくとりよせて（同）十一七あげーの上ゝおきて補（宇治拾）三みにを打かづきてなげーの上ゝの ゞりて（榮もとの雫）御ざうのありさま云々なゞーのさこのさ四を

んむぐりのゞそのけて（狹）三云々口をさひてなげーゝより給へり（同）四上あげーゝより〳〵り給ひて（著聞）八二あげーのおりゝ大臣三人候つる

補 なぶる（万）十五卅五「さゝ竹の大みや人ハ今もりももひとゝなぶりのみこのゝるらん

（遊仙窟）五劇ヒトナブリ（靈異記）中四卅縁嬲ナブル

かふでん 納言（源梅かえ）十九納言ゝのゞりてみえんの御心ふゝ〳〵るべー

なでろ（元眞集）廿五「伊勢の海のあまのつりふね春風ゝなでろゞ高ゝいかゝゞぶらん（夫）卅三西行「ゞが戀ハゝゞーまが沖ゝこぎいでゝ〳〵おでろゞづらふあまのつり船（散木）上七十四「沖つ風ふけひの浦のゞゞーさにおでろとゞもゝ千どりたつあり（堀太）海路十むかし師時「手もさゆく浦づたひーてこぐ舟ハ沖のおでろゞおづるおるべー（散木）中八十おろ猶たゝーとてあぎもぞるをゞて「おでろゝハろにハ日でろとゞまりて云々おぎもぞりゞりあれゞがわゝれの道ゝおちもふゝのおん（夫）廿三西行「磯ゝそる浪の間おゞく見ゆるゝのお沖ゝなでろやゝかく見ゆらん（同）廿六公朝「おでろたつあハぢのとより住ゝよーの岸ゝむゝひてぬさ奉る（散木）中八十おまへといふとおろゝて風吹なんとゝおでろと申ものたつといひひさゞぐを聞て（新六）三海信實「ゞふハ又おでろ方よせ風やめてやゝゝれ渡る沖つあさなぎ補（拾玉）二「うきねゝるよものおでろの程

ふけてよさのうら松風うらむ也（山家）下「あたぢーませとのかでろいたかくとも此ーほたほおーほたらむや（同）同「いそほをる波のけもーく見ゆるらな沖ほかでろやさこのく行らん。伊勢物語古意五、廿二説わり可考合

かでり　浪ノウヘ（催馬樂）紀伊國風ーもふいたれバかでりーもたてれバ（万）七、三「かでの海のあさげの名殘けふもかも磯の浦間ほ乱れてあらん（元輔集）一「立かへり見れどもあかぬ春風のなでりほゆる藤なみの花（元眞集）廿二「いせの海ほ名殘を高ほこぶるあまも物おもふおとハえーもこにきト（万）六、廿六「あほかがほ汐干の名殘よく見てお家かるいもが待とハんさめほ人の見るこを吾ーともーを補（万）四、三十「難波方塩干之名凝（ナゴリ）あるまでに

かでり（六帖）五、上「夜もをがらかづさハりぬる妹がそでかでり戀ーくおもはゆるかな（源かしハ木）四十「例ハ心づようあざやりほ云々かでりなく人ころー（同橋ひめ）二世の中ほもーたかめられ給ひけるまぎれほなかくーいとかでりなく（落くぼ）三かでりなくもある御心りかと見る（源わか紫）四十「かーかりつる人のかでり戀ーく云々ふー給へり（同須磨）廿「名でりもあハれなる物がたりをーつゝひと宮のうちおのびてかきあへり（榮楚王の夢）廿三「西ハ大宮より云々かでりハつゞきたる程をおーそかるべー（源わかし）四十「あかををかーとおぎろへる波あらきを（元輔集）八「池ちのくふる初雪のかでりほハ玉のうてかもあらたまりぬる（同）九「万代の秋やおのをん七夕ハ扇の風の名でり久ーく（同）廿一「行のへりほとをるらかる秋よりもかでりハいかゞ天の川波（中務集）廿四「白山のゆきのなでりハさむくともかたをの風ハあふぎつゝもけ（源夕がほ）四十二「おとかるなでりのこらぜ（同若紫）四十二「返をゝくおーらへおきて出給ひぬ名でりもなぐさめがたう（同紅葉賀）十三「男みこうまれ給ひぬれバなでりおく内ほも宮ほも人々よろこび聞え給ふ（同よもきふ）十七「日でろふりつるかでりの雨（同東や）四十二「ゆをるの名でりほやこゝちもかやまーく（同夕かを）五「うちをそてものーを給ひほれるかおり（同玉かつら）廿一「屏風さつ物なでりかくおーあけて（同末つむ）二「さてーもをぐーもてをかでりかくづほれて補（玉勝間）ほ云六帖ほ「うつくーと見るたびでとほかでーおの花のなでりハをーくやハあらぬ此かでりハ近き世にいふなでりの意ほ聞えたり。（貫之集）「こぎかへり見れどもあかぬ春のかでりのふぢかをその花（後拾）別、長勢法春上「あでりあるいのちとおもハゞともづかの又もやくるとまたまーものを（同）能宣「さくら花ほはふなでりほおをかたのもるさへをーくおもをゆるかな（万）十一、廿一

「夕されバきみ來ますとまちしよのなごりぞ今もいねがてにする（源すま）十五
めやかよもあらでかへり給ひぬるなごりいとゞのあーうながめくらし給ふ（同わかし）「打そて、立もかあーき浦おみのなごりいかよとおもひやるかな（新後）別宗尊親王「いかよせんとまらぬ春のよかれみもまさりてをーき人のなごりの（散木）「さなバたの逢夜のそらぞうらめしきあけぞバかなしかバ嶺よこかれん雲をだにありしなごりのうたことも見よ（新後）春下、入道前太政大臣「山ぶきの花のしらつゆむすびしぬもうしや春のなごりの（同）夏、院御製「立かふるなごりやなをものおもるらん花の香うけきせそのそでろも（新拾）神祇「あもれとや神のかゞみもてらし見る今もとおもふ君ゞなごりをといふ冷泉語の先達餘波の字にあて、解さる如く波の引さりて後になほ所々よ海潮の遺れるといふを本にて何事よも其物其事のそてたる後に其氣の遺れるをいふ詞也のあり
といふ詞も此語の轉れるにやあらん大かさ同ドさまよきまゆまゝ体言なる故に又のこらぎといへる也人のなごりをそーむといふも其人の去たるあとよ其けーきのおもかげよ覺ゆるをそーむ意也然るを今俗の言よ未だかれざる前よりナゴリヲシなどいふいと〳〵轉りたるにて理あーさてなごりの波凝（ナミコリ）の約れるか云々

○廣足云此說のかなぎ別に論べし○（新古）別惟明親王「なごりおもふたもとにうねてしられしりわかるゝ旅の行末の露（拾玉）四「とひし人もくひなにのこれなごりかな跡ふかき山の槇の板戸よ（續古）春下内大臣「今ゝとて月もなごりやをしむらん花ちる山の有明のそら（大和物）「いかなれバかつ〳〵ものをおもふらんなごりもなくぞこれゝかなしきの○直解云なごりもなくといかなしさのおもひのこれ事なきをいへり（新續古）春上雅縁「なごりあれや霞の袖よりをしねの。なごりをおもへバにやの意○コレ（同）春下「むらさきのねぎりの衣春くれて袖のなごりふかゝるふぢなみ（源わかな）上五十六「玉梓の君が使ぎまちし夜の名凝ぞ今もいねぬ夜のおほき（新拾）別爲世人々「こぎ出るあーなごりを熹ひける時云々「なごりをとめてさもりたよせぬ（新後拾）別、よみ人しらす「あたひえぬなごりにそへて思ふのお歸らんそどの心づくしを（新古）雜上最勝寺の櫻ゝ鞠のかゝりよて久しく成よーを其木年ふりて風よたふれたるよー聞侍りしかバをのおどもよおほせてこと木を跡ようつしー植させしー時まづまりてこ侍れバ數多の年々暮にしー春まで立馴よけ
る事なごおもひ出てよみ侍ける（雅經）「馴〳〵て見しゝ餘波の春ぞともなどもら川

の花の一た蔭（此あごりい今俗言にいふあごり也花のしたかげよあれ〳〵て此春見た花が別の春であつたとろの時何故志らなんだ事ぞとあり

なでりやこ（榮楚王の夢）卅六中納言どの〳〵あかゞさの後なでりやみおそいとそーうきね

なこそ（源とこ夏）廿五なおその關そやそをゑさせ給ひつらんとなん（後）戀二、小八條御息所「立春、義家「吹風を

よらばこの夕ふむもかり近けれどされか名こその關をそゑけん（千載）

なこその關とおもへども道もせよちる山ざくらかな

なでかりつる（枕）十二風いたうふき海のおもてのたゞあれにあーうある夕物も覺えぬ　とまるべき所にこぎつくるほど船夕波のかけたるさまなどいさゞかりなでかりつる海とも見えぬかー

なでむ　同（伊勢集）廿四「なごの海いあれや增らんおきつ波なでまん方のあされもとめよ　補（新後拾）雜春、よみ人しらす「なでむてふ神のおるーもこさらーの川のせ清き夏そらへかも

○なぎぬ　カナノ順ニ出ス

なでう（源梅かえ）十六こまのこのこそのむたこまゐにあでうなつこのーきぐ

なでこ（源夕ぎり）六十六十いとゑかやこのに心うつくーうらうたきもの夕心もさおもを

る人なれゞあなでこつゝ物ー給ふを

なでやら（遊仙窟）不輕盈（ナゴヤカ）（狹）一ノ下四衣の關をうらこゑぶれで同ドさまをのこあでやかにいへゞさそが夕情ざつ心にて（源まきはしら）十氷もとゑおんこのーなでやらよいひる給へり（同さゝき）卅五あまめかーさそひてなつかーうあでやかまぞおもーまゐ（同はし姫）廿一あでやかなれゞ見ならいぜ成夕ゑるめにて（同こてふ）九あでやかなるもぎふ）十九あでやかなれゞ見ならいぜ成夕ゑるめにて（同こてふ）九あでやかなるゑむひ（とりかへばや）一あでやかまあてゝかに見あつかひ給ふ御（万）四ノ十一「むーぶそまあでやがーたよふせれそもいもとーねゝゞはたー寒ーも

なでこのもらへ（後拾）夏、伊勢大輔「こあらみもあらぶる心あらドかー波もあでこのもらへーつれゞ（拾）夏長能「さゑへあゐにあらぶる神もおーあへてけふいあでこのそらへなりより（和泉式部集）上「清き瀨夕なでこのもらひーつるより八百万世ゝ神のまよ〳〵。あごしの被といふいひがことありといふ說松の落葉三ノ十のひらにあり

あでこのかぐら（夫）九顯昭「思ふことある川上にうちもへてあでこのかぐらこゑをこぬなり

かえでみ（源はしひめ）七御衣そもあどかえをみて（同やとり木）五十四ゑもづらへど

ものいたうなえそたりつるをがたどもあど

おえまなえ（源さかき）八十五　そのよいとおそろーくやえあかー給ひつその日のひる

つかたよりをさ〳〵物もの給ハぜたべおえまおえふー給ひぬ

おえとゐり（宇治拾）三ノ十四　なえとゐりさる衣に袈裟などもところ〳〵やぶれたり

なえかゝり（竹とり）五　物におそハるゝやうにーて相戰ん心もおかりなりからうど

ておもひおこーて弓矢をとりたてんとをれども手にちからもなくなりてなえかゝ

りさる中に云々（枕）十二ノ二十　ひとへなどきよゞにうに色の裳などなえかゝりていあら

ぜいときよゞなり

おえさる（源帚木）廿　おえたるきぬどものあつでえさる大いなるこゝろちゐれて

なえ〳〵（狹）一ノ廿　下いつもなえ〳〵とやつれおーて補（同）三　なえ〳〵とーてのたまひ打かれて

なえゞ（蜻蛉日記）中ノ十　上おをーハありきおどもかさかりなんのーおぞおもふまひる

つかたなえゞ〳〵と見えたりーかバ（和名）三ノ八　寒訓阿之奈閉此（盛衰）十九ノ廿一　あらい

ぬかち道なれバなえゞ〳〵その日ハもり山のやどまつき

なえて　痿（枕）九ノ十　雲林院ちそく院などのもとまさてる車どもの葵かづらも打なえて

見ゆ（源若紫）四十一　の御うつり香のいとゞうえんまおこりへり給へれバをかーの

御まをひや御ぞハいとなえてとこゝろぐるーばまおゝいさり

補**おへく**　**なへ**　**なえ**の別山口菜上三十五　よりくもーくいへり

なで　詞（古）戀三　小町「そるめなきさが身をうらとをらねをやかれなであまのあーさゆ

くくる（竹取）ぬれたる衣たまぬきりへなでおんたちまうできつる（とりへやや）

三「見てもまた袖のなみざぜせきやらぬ身を宇治川まに沈そもてなで（新古）戀五、馬内侍

「つらゝらバ戀ーきことハそれなでそへていおとかをづ心なき（伊勢集）三「見

もてゞ空まきえなでかぎりなくいとふうき身の世まかへるらん（拾）雜上、元輔「う犯

世まハゆきかくれなでのきくもりふるハおもひのほかまもあるゝな（狹）二ノ下十八「を

あの世も何たのむらん竹の葉まのゝれる雪のきえもてなで（新勅）雜四　知家「あさぢ

山色かハりもく秋風まこのれなで鹿のつまをこふらん（新古）哀、源二位「おもへ君もえー

煙ままがひなで立おくれさる春の霞を（同）雜下、冷泉院太皇大后宮「つ犯もせぬ光りのまよも

まされなで老てかへれるかまのつれなさ（清慎公集）「心より誰かハをらんうぜか

ぜまこもるおもひのいろハきえなで（同）「今よりぞうれーかりねるたのむべきこ

ころまもやくさらバありなで（同）「何せんにさえぜゆかむハかすが野まつまバこ

かかのたねいたえなで（和泉式部集）上「かりにこーあまもかれなでうらさびてた
た見るまゝにおのがをとさぞ（朗詠）「あか〳〵ときえいきえなでうづき火のあり
てかひなき物思ふ身い補（万代）戀三、入道前攝政左大臣「時とかぬ戀いふ下のねよとともよむ
せぶはふりのもえもつきなで（同）同隆後「つれなきよおもひさえなで猶こふる我心
をぞ今いうらむる
なでつくろふ（源かゝやき）四十二御ぐーを なでつくろひつゝ聞え給へば
なでつれて（源かしわ木）廿八御ぐーの末の所せうひろごりたるをいとくるーとおや
ーてひたひなどなでつれておいするに
なでふ（蜻蛉日記）下、下十八幕のつらよなでふことともなきびりやうげ尻口打おろーてさ
てりくちの方をざれのをたよりきよげなるかいねりよ紫のおりものかさなりさる
袖ぞさー出ためるを（竹取）かくや姫詞それい世間心がそく哀れよ侍るなでふ物を
りかゞき侍るべきといふ（源帚木）廿八下が下の中よいなでふことりきこードノヨナコトヲキヽコイレルコトガ召所もべ
らん（枕）一、十中間なる折よ大進物きこえんとありと人の告るを聞ー召てまさなでドンナ
コトふ事いひて清ニ笑もれんとからんと仰らるゝもいとをかー（源椎か本）十九いまさら
になでふさる事の侍るべき（枕）十六、一まをがめよ二まいいるやといふをなでふこ

とゝるひとのかなれでいそぢうとらふ（狭）一、中、卅五、ナヤナキ人ノ詞丸い宮の御前よまゐらせ
やなでふおらぬ人のあるぞとよと打むづりりたまへば（源花のえん）五めーよせた
りともなでふことのあらん（落くぼ）一、末。少納言ノ君落クボニ男モチ玉ヘト云ヒ君詞なでふかゝる見ぐ
るーき人がさる事い思ひかくるといへば（空穂俊蔭）上、四十さるをさなきやどなれば
なでふとざをもえせぎつとめてちかき河原よ出てあそびありけば云々（同）下、五十八夕
よさもいいれたる事なれどなでふ人ゝかゝゝるをまひよて世よいへん（同）同五十七。子、詞
此もてとづらひ侍る人今さらよなでふ世づいたる目をゝ見ん山の見るめもとづゝ
ーとてうできねも申さねバ云々。世ヅクトハ世ノ交リ（同たゝこそ）廿ナレタルヲ云ナリ なでふちぎ
りゝ侍りけんらうさく覺えーをぞよいとゞくてまかりかくれよーゝバ云々（同藤
原君）廿三とか宮の御爲なおろそのよいまをがる殿よいなでふ所のとらにべき（源
さかき）九十七此朝臣になでふとざー出させておもきろく給いせん（榮花枝）十七なで
ふることをとてさゞにあるべき（源とこ夏）四同ドかざーてまぐさめんになで
ふ事かあらん（同薄くも）四あまぐ〳〵ーなでふ尼よゝかり給ふべき（同椎か本）
十九今さらよなでふさる事ゝいい侍べき補（大和物）百五段なでふかゝゝるをきありきをー
てらくとびーきめを見るらん（源とこ夏）おゝどのざーよてなぐさめんよなでふま

とのあらん（伊勢物）十五段　みちのくまでなでふことなき人のめづかよひけるに

かでふる（空穗嵯峨院）五十大宮詞　これもなでふかゝる日を見るべきとてもろとももよゐ給ひぬれば

かでふるの（同）同一。ふと心おの事ども打ちに定まりかば又の日法師ぞまりなんなでふるこの世まどろるべきとおぼえきて

○かんでふ　カナノ順ニ出ス

かでこそ（夫）九光明峯寺入道「ゆきゝまやいもやなでこそ定めけれ（同）同爲家「ふるさとやたれよよそへてうゑおきけんかきねなでこそ花咲ぬらん（同）同兼昌「おぼつかなかからあでこそあゝまでよされかわたこてうゑそめれん（同）同俊頼「君が代のためこそひかん春日野ゝ石の竹ぞも花咲ぞまれり○契沖云かでこそ秋ゝさら也冬もまれ〳〵さけばとこ夏とゝ名をおほせたるなるべし定家卿の歌ぞ「霜さゆるあこたの原の冬がれもひと花さるやまとなでこそ（後）戀六よみ人しらず「冬なれど君がかきねぞ咲ぬれば雪ぞ花とはみるべかりける

かでもの（續千）釋教鳥羽院の御とき御なで物の鏡を給ひて奏こ侍りける覺鍛（源上人東や）卅「見こ人のかたろからば身ぞへて戀こき世々のかで物ぞせん（同）卅かさながさるゝかで物いでまおとぞのこいかでなぐさむべきことぞ補（同）「そそぎ川せゞぢいたさむかでものを身ぞそふりけとたれろさのまん

かあるところ（拾）雑上天暦御時名ある所を屏風にかゝせ給ひて云々高砂を

補かさる（後）雑一枇杷左大臣「ならの葉のもりの神のまこけるそこらでぞをりこさゝりなさるな

かさぬこ（竹とり）むをめぞこれにさべとふこをがこ手をぞりの給へどおのがかさぬ子なれば心ぞもたがへぜ。かんあるとゝ印本ナシいひて月日を過しおくる。。

なされ（枕）十一、廿六月かげのそこさなさこ女ノうころざまへをべりいりたるぞ男ノきよせ女ノ顔あらむまかされてこらふもをかこ

かさんま（神代紀）上、廿四汝所生兒必當男矣（マスラヲナラン）

かされ（源夕かほ）十二ものゝかさけをらぬ山がつも花のかげこはやそらいまこきまやこ（同東や）廿くひ物もところせきまでかんもこびいでゝのゝりれるを夕もをどいそれをいとかこきかされこおもひければ補（新續古）戀三忠貞「おもひねこ

こが心から見る夢もあふよい人のかされなりけり（新古）雑下西行「末の世も此かされのそろもらぜと見こ夢なくばよそこさりまこ（續古）雑中爲家「さえぜとふ筧の水の情

こそおとづれながらさびしくもりなれ（新後）雑上遊義門院「あさけとや泪のかゝる袖よりもながきよもがら月やどるらん（玉葉）夏實後「人をとくあさけありけり郭公わがねざめよりおとづれもせぬ（同）秋下爲兼「いかなりし人のあさけらおもひ出るこしらたかたれ秋のよは月（同）秋下永福門院二條「もみぢ葉のをりそこもれぬなさけよもなれこし雲の上やこひしき（同）雑五永福門院「心うつるなさけいづれとときかねぬ花やとゝぎす月雪の時（同）同宗尊親王「ふゝらぎいとまる心も有なましうきぞ此よのあさけありける（同）同爲子「心ひくかとをかりよてあへて世の人よあさけのある人ぞあき（續千）冬入道前太政大臣「あさしこそ人の情もまたれしのあまりあるまでつもるゆきかな（風雅）雑上憲淳「時しあれば花鶯のあさけをも外よ尋ねぬ春の山里（新續古）戀四茂里「夕ぐれをさのむあさけの殘らぎれ今朝ぞかぎりのいのちあらまし（同）同よみ人しらず「かぎりぞとをかれし時よいとぬあそ思へば人のあさけかりけれ（万代）戀三、證蓮法師「おもひねの己が心よりこる夢をとゞあさけとて袖ぬらしけらん（新古）戀四西行「今ぞしるおもひ出よとちぎりしいとそれむとてのなさけなりけり（同）釋教寂然「花のもと露の情いそどもあらじとあひをゝめそ春の山風（續古）春下、後法性寺入道前關白太政大臣「さらぬまれたれこのいとひし我宿を花こそ人の情なりけれ（夫）十八「あらそるゝ雪の下葉のふこのみぞり松のなさけいを冬ぞ見えける（續古）戀五、三條入道左大臣「さのめぞべ思ひ絶てもやそあまし何中々の情なるらん

なさけなのいに（源みのり）七さそが情をうもし給ふ方〳〵

あさけがる（源關や）六たゞあの河内守けまむかしよりを況心ありてをこし情がりける

あさけたつ（源椎か本）廿四あまりの情だゝんもうるさし（同帚木）卅二

たゞさらんなん（同藤のうらは）十三あさけさちさまふこか人いうらめしと思ふもあり〇夕ぎりの一方よ定り給へるを戀る人のうらめしとおもふなり

あさけづくる（源關や）六をもしこそさの給ひし物をなど情づくれぞういべこそあれつらきこと多かり

あさけつき（空穗たゞこそ）卅。父君たいこそをざんげんせし北の方の事をこゝこそ云々うらを申さまほしくとの給ひけれどなさけついつい給へる人よて云々

なさけなく（伊勢物）六十三段子三人をよびてこのたりけりふさりの子いあさけなくいらへてやこぬ（源ゑ合）四、齋院御返し朱雀へし聞え給いざらんもいと情なくかたゞけかるべし（同帚木）卅一かへしせねばあさけなし（同玉かづら）十四例の船子どもらぞまりよ

り川尻おすほどいとうたふこゑのあさけなきも哀ㇾ聞ゆ（同をとめ）四十九聞えさせ給ㇾさらんもあさけれバかへさよわくさらせ給ふ（同帚木）十八あとさらにあさくつれなきさまを見せて補（万代）戀四師時「なさけなき人よりもなよ〳〵ようきものㇾ身のそこ〳〵らぬこゝろなりけり

あさけなけ（源夕がほ）四枝もなさけなよ〳〵ある花をとて

あさけ〳〵〳〵く（源うつせみ）九さそげよあさけ〳〵〳〵くちぎりおらせ給ふ（同帚木）四十一なさけ〳〵〳〵くの給ひつくしべかめれど（同やとり木）三心をへなさけなさけ〳〵くあつこ〳〵き所おもしつる御かさなれバ

あさけおくれ（源あふひ）十物よあさけおくれてすく〳〵〳〵き所つきたまへるあまりよ

あさけふこのき（源あけまき）九十五なさけふうとかきことよもまめある方にもおもひやりおそかる御心をへを

なさけある（伊勢物）百一段その日ㇾあるじまうけ〳〵たりけるなさけある人よてかめに花をさせり（源桐つぼ）九人〳〵らの哀れよあさけあり〳〵御心を上の女房なども戀ㇾ志のびあへり（同帚木）十もゝなきついでのあさけありをかき〳〵よをゝしめる方おくてもよこのるべ〳〵と云々補（玉葉）雑五院御製「あさけある昔の人ㇾ哀よてこぬこがともとおもへるゝこのお（新古）雑下西行「あさけありし〳〵むかし〳〵のこおぼえのそれてながらへまうき世よもふるかな（同）戀三西行「あこれとて人のこゝろの情あれな數ならぬにいよらぬなゞきを

あさけそてぬ（源玉葛）四十八。御返リチ情すてぬ御心よてらき給ふ

なさ〳〵（狭）一、下十四たゞ〳〵ある名さ〳〵よてとかくさそらへんもいとほ〳〵うそべるべ〳〵（同）四、下二。若君實ハ入遣ノ腹ナリ今までかる〳〵〳〵き御名さ〳〵もあるまゝきことなるを（源かけろふ）五十五たれそととひ給へバかれ御方の中將の君と聞もなり猶あや〳〵れこさやされよかとかりそめよもうちおもふ人にやがてかくゆかし〳〵げなく聞ゆる名ざ〳〵よといとそ〳〵く

なぎ（万）三、四十三「春がもとみかのさとのうそこなぎなへありといひ〳〵えいさ〳〵よけん（式）供奉ノ雑菜ノ中ニ水葱ミユ今水アフヒト云モノ、ヨシ眞淵ノ別記ニ見ユ（勝俊山家記）見もゞらぬ草のあや〳〵きそバ名もゆかし〳〵くて問ふよ是ㇾこれなぎあれいさいたづまなそいらへてなをかそよたてるもをかし〳〵（夫）廿八知家「おのれさへこひぢよぬれて苗代のおなぎがもとよなくかもづかな（同）同信實「苗代の田づらのあ

せのうゑこなぎまくてふたねをとりやませせん(和名)十七ノ水葱奈木一云薤菜(催馬樂)田中井戸田中の井戸ノひゐれたる田あぎつめ〳〵云々(天智紀)廿童謠奈疑能ノ母滕補(宇治拾)三十をぢかりむを〳〵と打くふ此あぎい三町をりりうゑさりける

ゆかくゝへゞ云々

あきいる(源わかし)八あかぎりなしくて御供ゆまゐりなんとなきいり給ひて

あきされ(源わかな)上ノ十四七目つやゝかゆくるしきされ給へり(源まきとしら)十四御めのいさかみてゞゆくるしきまで御目もあきされ給へり(源まきとしら)十四御めのいさうあきされたるぞをあしものけれぞ

なきゆあしてもゝ(千載)戀五(和泉式部集)「うらむべき心をかりいあるものをなきゆあしてもとゝいぬ君ゝのか(源須磨)十七そしてゞゆあこが身そなきゆあしてもゝ東宮の御代をたひらかゆおもしまさゞとのゝおゞしつゝ

補(宇治拾)三身をあきゆあしていりぬ

あきとよむ(榮月の宴)九。后ノ宮ナクナラセ殿ヲら女房さちあきぞよみたることりにいゝとゞき御ことありかし補(源わかな)上ノ廿五

むに

なぎぬ浪ニ(源須磨)四十八イフうらゝ〳〵とあぎこたりて(土佐日記)これらを人のさらふを聞て海ゝあるれぞ心ゝもそこしあぎぬ(伊勢物)七十五段「大淀の濵ゆおふてふ見るからゆ心ゝなぎぬかたらゝねどゝも補(万)十七ノ卅四長歌云々あさあぎゆよをるをらあゝゆふあぎゆゝちくるしその(同)四ノ十九「をゝぢのらさゞこえくれゞもくひの海あさあぎしたり船梶もがも

○なでかりつる カナノ順ニ出ス

○あでむ 同

あぎぬ和(万)四ノ五十三「あひ見ていをゝしもゝ戀ゝ奈木六かとおもへどいよゝ戀まさりけり(同)十一ノ二十一「ゝやゆきていつしら君を逢ゝんと思ひしし心今ぞあぎぬる補(万)十九ノ十九見るごとよゝろなぎむと奈疑牟ト(同)(カケリ)同十一そあもゑゆ心あぐやと(同)九ノ廿八ゝつちのあぎあむ時もゝさらあむ。四十四あぎの事記傳三十五ノ四十四に説あり同三十三ノ四十四同五丁に万葉の歌を多く擧られたり此詞中二段の活なる事万葉の歌をもてをるべし記傳ゟ引れたるをみるべし

○あでゞ カナノ順ニ出ス

あきぬらゝ(源まぼろし)四そでのいさうあきぬらしし給へりゆるを

あきをり(枕)七ノ十。齋信清殿上あぞに明くれなきをりもあらゞ何事そのおもひ出ゆ

せん

あきらへる　泣（狹）四ノ中廿七。古本君ハいとゞおもひまさり給ひてあきかへり給へるさまのあのめあらぢこゝろぐるゝ夕ある御さまなどおぼつかなくつらひぬ

あきかへる　暗（蜻蛉日記）中ノ上廿一「あきらへるこゝろぞきやひて聞ゆある待やおつらんながら」

關のひぐらし　虫（好忠集）補「鴈かねぞなきかへるある世中をうしと見つゝも秋ハいとゞ（同）「鳴かへる鴈のなみだのつもるをや苗代水と人のせくらん

あきぐれつくり（枕）七ノ二「あきがれつくりけしきことおもせぐいとかひなし」

あきから（源夕かほ）卅七ノ「あきからを見ざらんがいとふせかるべきを

あきかけ（源かけろふ）十一「いき給ひての御をくせハいとゞくおもせぐいとかひなしと思へバ云々（同須磨）十九「あきかけのかすよいきとゞき事をやうさがハれ給ハんと思へバ云々（同みをつくし）卅六「いかやいかゞ見るらんよそへつゝながむる月もくもがくれぬる

あきぐれつくり（枕）七ノ二「あきがれつくりけしきことおもせぐいとかひなし」

あきから（源夕かほ）卅七ノ「あきからを見ざらんがいとふせかるべきを

あきかけ（源かけろふ）十一「いき給ひての御をくせハいとゞくおもせぐいとかひなし」

あきぐれ（新六）かけろふ「哀れなり山嵐吹夕くれはあきかぜまさる軒のしげろふ

あきね（源わか紫）廿八「なさねよふしくらし給ひつ（新古）哀傷、上東門院「逢ふ事も今ハあきねの夢ならでいつゝハ君を又ハとるべき

あきら（古）戀三忠岑「みちのくはありといふある名とり川あきあとりてハくるしかりけり（同）戀三、みそるのありすけ「あやなくてまたきあき名のさつた川こさらでやまん物ならなくに（和泉式部集）下「くさ〴〵ふかふといきねどあき名そバいつらけふたゞ人ないつむやハ（後）雜二（伊勢）四十（六帖）五「吹風のあたのちりはもあらあくはさもたゞ（後）ちやそき我あき名ハかな

あきくらし（源はゝそ）十九「つれ〴〵とわがなきくらし夏の日をながめくらしてとがまでむしの聲かな

補　あきやう（源かしハ木）二卅「なきやうはおぼえずそれさり

なきまどひ（源桐つぼ）八「さふらふ人〳〵の泣まどひへも御あそびのひるまおくながれおもてまどひを（同かしハ木）九「いとゞうあきまどふ

あきまさる（源かしハ木）六「いとゞあきまさり給ひて

あきふけ（源わか紫）四十八「いとゞびしくて泣ふし給へりめのとい打もふさぎもあかしこがる（源桐つぼ）八「母北の方おぼえずふりはのやりなんとあきこがれ給ひて（同よこ笛）十八「あきこがれ給ふはあきまふる（古）戀三、橘のきよき「泣こふるあみぢは袖のそやちなバぬぎうへがてらよるは

こそいきめ

あきまる（狹）一ノ、上四十四 泣でゐいまーていとさりなけれど

あれていたーて（空穗藏開）下、四十四 仲頼のぬしーあきて出ーてあそぶえゞにい行政樂ま

い仲頼そこらのあそび人どもまを人あくあそぶ（同）同四十七 わがをるわざとてけふ

ーつくーてんぎるおもふ人もきあーめせとおもひてあきてを出ーあそびせめてい

づまと人々もいでぬ（同）上、一十二 さちてあきてを出ーて舞もてつ（同）冊四 らう中將おり

て陵王をそれうへりのきてを舞ふ（源帚木）十七 いかでまのひとのためまいとなきて

を出ー

なきあかい（詞花）雜上 馬內侍 「夜のつるみやこのうちにあめられて子をこひつゝもな

きあかいかな

あきあと（源桐つぼ）十 なきあとまで人のむねあくまでかりねる人の御覺えかなと

補 あきあふ（千載）夏 慶遲 「いまーへをこひつゝひとりこえくれゞあきあふ山のそと

とぎいのな

なぎさ（古事記）上、五 注訓波限曰那藝佐（神代紀）下、冊 置之波瀲（源あふし）七 いまい

十八 二 二 二

の給ひて（拾）雜下、麗景殿みやのきみ「あき人のかたとおもふよあやしきいろそでのぬるゝかりけり

あきものぐさ（拾）雜春みつね「さくら花とぐやどのそありと見ばあきものぐさいおもいざらまし○抄云何モナキ〻也櫻ノヨソニハナクテ我宿ニノミナラバ其外ニ何モナクモホシトハ思フマジキトナルベシ（同）雜下（六帖）六「さねなくてあきものぐさい生ゐまくてふことのあらじとぞおもふ

あめたる（うつゝ藏開下）あさまし〻くさべをひて對面給いりゐるをいかゝなめたるさまゝ侍りねん

あめらか（うつゝ俊蔭）下、卅。夢物語いとうつくしげなるあめらかなる所ノ云々（朗詠）鹿蒼苔路滑僧歸寺

なめく無禮ト云〻也（枕）十、十時鳥をいとあめくうたふこそ心うき（蜻蛉日記）中中、ふるまひのあめうおぼゆることもの〻似ぜ（源まきはしら）卅七うちともあめく心あるさまゝ聞しめし人々もおぼせ所あらん（繼體紀）十六受天皇勅輕遣使乎補（安閑紀）三輕背使乎宣旨。此詞ハくしきの活ゐてなめしくきと云活かすといへり猶可考。卅七○あめき（枕）二、十。文詞なめき人こそいとゞよくけれ云々、文ノミナラズ大方さしむかひてもあめきいなどかくいふらんとかたむらいさし（續紀）二卅無禮岐面幣利無久○あめし（万）六、卅三「やまとぢの雲がくれさりおかれどもわがふるそでをあめしとおもふな（同）十二、九「妹といへばあめしうるかも（源桐つぼ）廿六あめしとおぼさでらうたう給へ（伊勢物）百五段昔男かくていなべき人もあらじをといへりけれバいとなめしとおもひれど心ざしいやまさりけり（孝徳紀）輕補（源うき舟）四十五女宮ゐ物語などきこえ給てのついでゐあめしともやおぼさんとつゝましながらあめ夕（竹とり）十五宮ぐかへつかうまつらぢありぬるを云々心づよく承らぢありに事あめしあるものにおぼしめしとべめられぬるなん心ゐとまり侍ぬるとて云々（源梅がえ）十あめしあるをがたををゝそでらんせられ侍るなり（同をとめ）九あめけなりとてもとがむ（枕）十、六ことばあめしあるもの（源帚木）廿四せを況所に侍れバあめしある事や侍らん（同夕ぎり）七十三いろさまゝにこのあめしさをえびとおぼされバ（空穗國ゆづり）下、四十三只今いざきてをいせよとの給へバたゞ今いきさかしくむづこのうなめしあるゐさをも侍れバ今大きになりなんと況ゐ云々補（源浮ふね）

十九 かひあらむものからなめげなり（同）廿 あめげある事を聞えさせる山がつなども侍らまーかば

なめけれ（空穗 菊の宴）上、十七 ○アテ ミヤ「ひとしーやもそむべきものゝむらさきのくもよりふれるをとめなりともおぼーのくるこそなめけれとの給ふ

補 なめくち 蛞蝓（和名）十九、蛞蝓 奈女久知（枕）十二 いとゞくきさなき物、なめくち云々

なめて 並ナリ（万）八、一「たまきはる内の大野に馬なめて朝ふまじらんそのくさふけぬ（うつほ 吹上）下、卅五「花ちらば風も心ありこまなめてこゞが見る野べまでもーよきかん（万）一、十八 船並氏あさ川こさり舟さゝひ夕川こたり（同）六、十四 朝がりまだゝ丶ふき起ータがりに鳥ふこさて馬なめてこのりぞ立ー（同）廿二、「ひなめーけこまのみこ十九 との馬なめてこかりさゝーゝときゝむかふ

なめそゝ 並居（うつほ 藏開）上、五十二 奉り給へるものども御まへになめそゝ御馬どもひかせて見給ひて（榮花 花）七、十四 姫君ふた所藏人少將とをなめそゝて北のかた聞え給ふ

なゝ ナミノ心 〳〵（蜻蛉日記）中、廿 「あさまーやのどのゝたのむとまのうへを打かへーけるなゝの心よ（古）戀四、よゝ 八しらす 「みよーの大川のべの藤なみ花なにおもへこそ

がこひめやも（六帖）二 「なゝながら袖ぞぬれぬるあま小ぶねのりおくれたる我身とおもへば（元眞集）廿一 「末のやまもつ人をのこたのみつゝ我をばなみにおもふかるべー（中務集）廿四 風ふく日ものへいく人ぞ「ろせ吹ばおもひゆるかな住吉のきーれなみこもあらぬ君さへ（万）五、廿一 「こゝろゆつるまつら川の河なゝのあゝまーもそばこれこひめやも

○なゝ〳〵 一ト通り（源末つむ）十五 なみ〳〵のさいやもき御ふるまひあらねば（同わけまき）五十七 さやうのあゝ〳〵まいおやされぞ（同東や）六 なみ〳〵の人こもものー給ひねばかゝとゞけおう心ぐるーうて（同空せみ）初 女もあゝ〳〵あらぢかさそらいさーとおもふに（同壺木）四十 なみ〳〵の人あらばあそあらゝゝこもひきゝなぐらめ（同かけろふ）五十八 なゝ〳〵の人めきてあゝちなのさまやとものうれば（同夕ほ）九 ゝやう〳〵のあゝ〳〵までいおもやーかゝらざりつるをありーあま夜の品さため外のちいぶかーくおもほーなるをあゞ〳〵のある（同よもきふ）八 もとよりありつきこるさやうのあゝ〳〵の人の中〳〵よき人のまねに心そつくー思ひあげるもおやかるを

なみ 並（源玉鬘）卅六 北の町こものそる人のあゝこまいなぞゝさらまー（同）二 ゞあ

みれ人よいあらじとおもひて（源帝木）三十五
みあらんかーといづ
補 おみ 無（万）六「わかの浦よーやちくれば
わたる（兼輔集）「人ーれぜ春をこそまてわが
おそぢ（新古）離別 斎然「たびごろもたちゆく浪路とほれれいさーら雲のほぞもー
れぜ
補 おそかけごろも（新後）秋下 為氏「ーは風のおそかけ衣袖をへて月よなれたるそまの
うら人
浦 なみかぜ（躬恒集）「のどをざに見せぜもみぢいちりよりおそこにさへ波風
やふく
なみかぜ（後）雑三 人しらす「なみかぜよあらぬ身なればそよーれきーにもよらぜなす（續後。いか
りやてなん（蜻蛉日記）下（續後）釋教「とおふおるおみの數よいあらねとも蓮の
で同 かいら同
上の露よおりなん
なみよる（源のわき）十六ひきよせ給へるよ御ぐーのなみよりてそら〳〵とこぞれか
うりたるぞ 補（金葉）春 忠隆「よーの山そねよおそよるーら雲と見ゆるい花のこぞ

名おりえり
なみざ（万）廿四 冊まそでもちおそざをのでひむせびつゝ（和泉式部集）上「をゝよわ
そみだれておつる玉ぞこよおそだも人の目にい見ゆらん
おそだいづる（源帚木）四十五 女あさまーきよおそぎもいできぬ
なそだよくるゝ（源桐つぼ）十八「雲の上もおそだよくるゝ秋の月いりでそむらんあ
さぢふのやと（同すま）五 世のつねおさ思ひーられておそだよくれより（金葉）戀下 師俊
「名のゝめれあけゆく空よかへるさいおみざよくるゝものよぞ有ける
なそざよーづむ（源あかし）四十たれきおとゝいたべおそだよーづめり
おそざをうけ（源橋ひめ）三 おそざをうけ給ひて歌云々心づくーありやと目おーの
でひ給ふ（同わかな）下七十八 おみだそうけての給へば（同夕きり）廿二 見奉らで久ーうお
りぬるこゝちそやとおそざそうけての給ふ
おそだをひとめうけて（源すま）十二 女君おそだをひとめうけてこおおせ給へるいと
忍びがさー
おみざがち（源朝かや）三 年のつもるまゝにいとおみだがちにてそぐーむべるを
○補 なみざたる（万）廿六 たくつぬのーらひけのうへもおそだりおびきのたゆく

なごのたき（伊勢物）八十七段（新古）雑中「我よをばねふらあそろと待かひのなごのさきといづれたらん（源惟か本）廿一のひぐきもなみだの瀧もひとつものゝやうにくれまどひて

なみだのつらゝ（新古）雑上後成「とゝくれゝ泪のつらゝとけにけり苔の袖よも春や立らん（新）春上、惟明親王「ろくひそのなごのつらゝ打とけてふるをながらやもるをあるらん

なごのあめ（源さはろし）七先いとせきがたきなみだの雨のみふりまされば（古）哀忠岑わひし）「墨染のきそがともとれ雲なれやさえをおえただの雨とのそふる補（榮るゝ）「かくむかりなみだの雨れ日をふれば夕ぐれやぎのもうとあるらん

なごおとに（源桐つぼ）廿七な人なごおとゝ給ふ（伊勢物）九段「れいひのうへよなごおとゝてほとびよけり（源帚木）十二涙をさへなんおとゝ侍りゝ（同）十三なごたおとせば補（拾玉）一「まよひなん木々のこぞのうきそとはうちこるさびよ涙おちゝて

なごたぐむ（源わかな）上四我ながらつらくおやゝつぐゝにおもたぐまれて（同夕かほ）五なごたぐゝての給ふ（同さかき）八あいなくなごたぐゝあへり（仁徳紀）十四。口持臣の妹の歌我せを見れば涙みたぐまゝこせたりゝとてなみだぐみたり（万）三、五十二「妹とこゝみぬめのさきをかへるさよひとりゝて見れば涙具末之毛（源御法）九なごみたぐまゝく（源若菜）上、六哀におもたぐまゝくおやゝ出らるゝ事ども（源帚木）十なのおぼれとなみだなごみざこやる（源帚木）十三そさへおやゝてふゝたり

なごたてる（後）賀、右大臣「なごゝてる松のそどりの枝わかぎそりつゝちよをたれとかい見ん

なござもろ（源ゐふひ）卅九なござもろなるこざ泪もろおれど補（源夕きり）卅八なごたもろおもせぬまゝろがよさおれと（山家集）「君おたふ心のうちいちぐめきてなごたもろよもなる我身かな

なみだもろさ（源幻）十れいのなござもろさいふとこやれ出ぬるもいとくるゝ（狭）四、下廿八例のをぎよゝ方おのお御くせおれば（同）四、中五十大かた過よゝかたをこそれぬ御くせの涙もろさいさゆべき世もおゝ

補なみざもよやは（月詣）三、勝命法師「さらぬざよ都こひゝきおのゝめよなござもよは

ればやとゝぎすかな（山家）上「ひとりねのねざめし床のさむしろに涙もよはにそとゝぎすかな

なこそるて（順）廿七（拾）雑秋　人の家のつり殿よまらうとあまたありて月そ見る「水のおもにやどれる月のけそれきいかなこそるて人のねぬ夜なれば（補）（濱松）一上　もしらでとよひともしわたしてなこそるたり（榮鶴のとやし）よるもこかうしもまるらねばやがてそのまよかこそるてこのうらんよせかかをあて、

なみのもか（土佐日記）ねふうこあらけいそよ雪ふりなこその花さけり（古）秋下　康秀「草も木もいろかれぬれどもきたつこそのかこその花よそ秋かこのりける（後）春下　貫之「つねよりももるべになればさくら川かみの花あそまかくよそらめ（拾）雑春　貫之「やか見れば川風いたく吹ときぞかみの花さへ落まさりれる（古）物名　伊勢「波の花おきゝらさきてちりくめり水のもるとい風やかそらん

なこのぬれぎぬ（後）旅よみ人しらす「名よしおいべあたよそおもふたもれゝまかこのぬれぎぬいくよきつらん（伊勢物）六十一段「名よしおいべあたよそあるべきたもれゝまなこのぬれぎぬきるといふかり

なみのよりびと（夫）卅五家長「かしつ矛のむかしのあとよさちへりこりの浦よそかこのより人

かこのそあ（山家）上「水の面よやどる月さへいりぬるいなこのそあにも山やあるらん（新古）冬　是則「ゝゞさへよ今いときく社（壬二）上「山河の岸のうの花咲ぬれば波のそこある谷のうけもしー

なみのまくら　波枕（新古）戀四　公經「つくゞゝとおもひあかしけうら千鳥なみの枕よかくかくぞきく（同）冬　河内「水とりのかもれうきねのうきかがら波のまくらよいくよへぬらん（補）（壬二）中「打とけてぬるもかさゝけ浦のせよ涙のまくらも氷しよけり（同）「故郷をおもひあかしけなみまくら袖の氷も千とりかく也（新古）冬、後徳大寺「石をるる初瀬の川のかこまくら早くも年のくれよねるかな尾張の家苞云かこ枕普通い旅泊よよむかこそまくらよすといふ事此歌なるいめなれぬ詞あり此まろの文章よ川のながれの早きを瀬枕打てぞなげれけるといへる事あるい瀬よあさりてわきのへる事と聞えたればこゝも初句あはせて石にあさりてわきかへる心かるべし

なみのおこ（古）長歌　忠岑「菊の花ひぢてながるゝ水よさへ波のしこそおきやどよさりける

（補）なこくら　並礒（拾）神樂、よみ人しらす「たかしまやこその中山そまたてゝつくりかさねよ

ちよいなみくら

なそま（拾）戀一、よみ人しらす「玉江あぐこもかりふねのさーもへて波間もあらバよらんとぞおもふ（源明石）三「浦風やいかゝ吹らんおもひやる袖うちぬらし浪間おきあろ

あー　梨（新六）六、衣笠内大臣「よーふれどこのいらぎながらつれなーけあらぬものゝもとこそなりぬれ（同）同行家「のたえざいなりもなからぎもつれなーけおもひあへもやねていかたらふ

あー　無（源帚木）二なよびかゝをかーきおとゝなくて（同桐つぼ）卅一まるものなくもおいーなる（同）卅三あぐさむかたなくおやしをーをづえて（同をとめ）八一のさくあーき姿そぞそも恥おくおもゝちおこづかひむべゝーくもてなーつゝ（同夕ぎり）卅三まーぢもなくらうたぢなり（同夕かほ）四十九その人とおくて

○なかりつ　カナノ順ニ出ス

なー　ナラヌ、ルス（大和物）三（新古）戀四、よみ人しらす「戀ーさゝおぬるいのちをおもひいでゝふ人あらバあーとこたへよ（貫之集）下、廿ちかどなりかるゝとこゝ二月三日もとなつがもとよいたりてなかりけれバかくなんまうできたるといひおきてかへりさるつとめておくれる（源末つむ）廿三侍從ゝ齋院ゝ參りかよふ若人ゝてこのころゝかかり

けり（枕）四、十六又よるもひるもくる人をバ何ゝいなーおどもかゞやきかへさん（枕）十、廿人どもいざーもとめ尋ヌル　さそれど使うせゝなりあやーぐりさらへどつゝのひのあれバいいふかひなー（狹）三、上四歸りきてやあるとの粉川ゝひとたび〳〵つゝゝせどあーとのみいひつゝかへりまるれバ（源帚木）廿まちけるさまなりされバよと心おでりをるにさうどみいなー（伊勢物）六段夜も明もくゝ見れバるてこー女もなー（古）雜上よみ人しらす「老らくのこんとゝりせバかゞさーてなーとまたへてあいざらまーそ

○かゞをり　カナノ順ニ出ス

かー　て成（源椎か本）廿八姫君たちの御うーろこさる人ゝなーに給へる也けり（同須磨）卅七此殿の藏人になーかへりゝ給ひーて人なれバ（同手あらひ）二かれゝ何ぞと立とまりて火をあかくなーて見れバ（同榊）四十きぬのおとなひあめりにふるまひなーて（同玉鬘）廿人にも見せで尼ゝなーて云々といひちらーたれバ（狹）二、下かくなんときらまーかバいとかくよその物ゝいなー奉らざらまー（同）同八何でとをあかぎおもひて云々さをかりうつくーかりーて人をよこせその物になーつるぞとおもひつゞけ給ふ

○なそ　カナノ順ニ出ス

補　かー　生（万）九、卅三父母が成（ナシ）のまゝ〳〵むーむかふおとのこまおとゝ（古事記）成神（ナリベルカミ）

あーは（古）戀一、よみ八しらす「淺ぢふのをの、ゝ原ゝのぶとも人ゝるらめやいふ人あーに（同）夏みつねゝ「不と、ぎゝはゝれとゝあーは卯のもあのうき世の中になきこたるらん（源末つむ）卅一「あつかーき色ともあーはおに、ゝおのをゝつむ花を袖にふれけん（狹）四、下廿九「おもふおとなるともあーはいくのへりうらこわさりぬかもの川波（拾）雜上（六帖）一、下（貫之集）上、卅「おもふことありとゝあーは久かたの月夜とゝあれバねられざりけり（万）四、十五「君がためかこーまち酒安のゝまいとりやのまん友あーにて（後）夏いせ「二こゝろときくとゝなーはやとゝぎゝに夜ぶかくめをもさまーつるかな（拾）雜春躬恒「さかざらむものとゝあーはさくらをなおもかゞよのこまだきこゆらん

補　**あーても**（新古）戀二秀能「袖のうへは誰ゆゑ月ゝやどるぞとよそよあーても人のとへかー（美濃家つと）四の句よその事はあーてなりともといふ意人ゝ思ふ人也（尾張家つと）一首の意ゝそゝる誰をこひて袖は涙をかけて月をやどらをる事ぞと我身のうへとゝゝらぎよその事はーてもとふてくれよかーと也（美濃）或抄は此涙ゝ君故ゝれどもそれとゝ君がゝるまゝゝれゝ誰故ぞとよそでとよあーてもとへのーと也（尾張）此説の如ー（美濃）とゝいへるゝあーてといふ詞はかなゝもをべてかやうのおすといふ詞ゝさをあらぬおとをおひてそれはをいへゞ（尾張）大方ゝ此説のでとくなれど此歌なるゝーからぎをおにはいふもゝいとこのろーよそはなーてもゝよそにーてもはてこづからけうへとゝゝ我故とゝおりおがらよそのおとはあーてといへるはこそあれ（尾張）我とこひおもふとゝゝーりつゝ誰をこひて袖の上は月のやどるほどおきぬらー給ふぞといもん其人を哄をるはて俗はおぶるといふものの也おこのいひて人のとへかーとこひねがふべき事かゝ

あーぢら　生ル母ト（狹）四、中五十。宮姫君ヲメデタキナガラ飛云フカ　あかぬ事なくめでさき人を見給ひながらもかやうなる心のうちぞもたえをおらひはれるおのびがさの物おがかーさおどゝおのづからもりつゝあーぢらとのこ思ひ聞えさせ給へるかひなく姫君も打とけにくゝへざておほかりぬべき御心と人ーれを見おられり（とりかへてや）四、四十

補　**あーぢ**（空穗國讓）下、十八ふるびさるこのゝまさおのなーぢのもお

なゞる（字鏡）詰奈是留（文粹）十二、詰眼文有心神詰眼神云云

なゞかゝ（宇治拾）四、廿いかなりともあゞこのゝもさまれぬやうやあるべき**補**（著聞）十六、

十八 馬ょのらんとーけるになゝのられん(三部抄)つたかからん人のもぞ乁をゞ

なゝのそこーもいさとせん(同)おゝのいさのそ人ころさもあらん

あーたて(源玉かつら)廿九 腹々の何ともあるまゝ乁御子どもみを物めかーあーたて

給ふを聞ゞ

あーあけ(源東や)十二 上達部おいてれーあれゞけふあすといふさがりょあーあ夕

てんとこそおやせらるなれ

なーゑ(枕)九、二 宮い沈の御火桶の梨畫ーさるょむかひておいーまゐ

補 なび 火カ(蜻蛉日記)下、下、十八 十五日おびありー大夫のざうーきをのおどもおびをとて

さわぐをきゝゞやう〳〵ゑひをぎてあおらまやおといふ聲きゐゆる

なびく き(源みをつくし)初 世の人なびきつかうまつる事むかーゞやうなり(顯宗

紀)八 「いおむーろゝむぞひやなぎ水遊けゞ難弭企於己陀智曾能泥播宇世儒(金葉)

冬、康資王母もきふ)十 「さかきをやたちまふそその追風ょなびかぬ神いあらゞとぞおもふ(源ょ

くたりをもほのめらー給ふめるょおびき聞えをもてもおれさるいをさ〳〵あるま

ゞきぞいとめなれさるや(金葉)春 院御製 「風吹ゞやなぎのいとのこのたよりにおびく

まつりて過る春かお(榮月の宴)六 四の宮そ爲平也 かぎりおき物ょおもひ聞えさせ給

ひけれゞ云々 万の殿上人上達部おびきつのうまつりてもてもやー給ふそぞょ云々

(古)秋上、左のおは いまうち君 「女郎花秋の野風ょ打おびき心ひとつをされよよそらん(源帚木)卅七 とかくょおびきてあよびゆきみょくきのさちをも此人ょこやうとまれんと

ゞりおくおもひつくろひ(狹)一、下、廿一 およ〳〵とらうさゞにておびき聞えたるさまあ

やーう誠ょらうたゞあるを(万)八、四、十六 「秋の野ょさける秋もぎ秋風ょなびけるうへ

ょ秋の露おけり(和泉式部集)上 「おら波のよるょいおびくおびきものなびゝトと

思ふこれおらおくょ(源ゝふひ)九 世にもてかーづかれ給へるさま木草もおびのぬ

いあるまゝゞけり(同帚木)九 このみいーもょさすをられ下い上ょおびきて(同須磨)

十おたーうつゝうまつり世ょおびかぬ限の人々 補(月詣)四 「身にゝへてつらき

四 と何ょおもふらんいけらゞおびく人もこそあれ(同)院因幡 「おびきてもあそそた

るゝ朝ねがこいかなるそぢにならんとおもへゞ(万)廿、六、十三 「あをうなばら風おみな

びきゆくさくさつゝむ事おく船いもやけむ(新古)神祇、入道前關白太政大臣 「ねふまつる神の

こゝろやおびくらんおでょ波たつさほの河風(玉葉)春上 定家 「末とをゞこゝ葉のーを

ふ打なびきひとりなく野の春のもふぐれ

あびらー　靡（源 かけろふ）廿三 いとあつさのたへがたき日なれバこちたき御ぐしのくるーうおやさるゝまやあらんをこーまなさまなびかーてひかれたるほどたとへんものなーし（同 空蟬）六 さもなびかーつべきれーきまてあそあらめ童なれど物のおゝろバへ人のけしき見つべくおづまれるをとおやになりけり（同 わかむ）上、五 十一 さりぬべく聞えなびかーていみじくおのびてまゐらんあびきた（夫）九 顯季「夕されバ池の蓮のなびきたまに露吹こさに風ぞをゝーき

補 なびきも（續拾）戀二、院少將内侍「わが戀ハなぐさかれ浦のなびきもの心ハよれどあふよーもなーし（新後）戀二 延行「思ひ川いつまで人まなびきもの下まに乱れてあふ瀬まつらんおもたうらいのたうー（源夕顔）廿 一 なもたうらいのたうーとぞをがむなる○南謨當來導師也

なせまし（空穗 樓の上）四 廿 上 なせまし内侍りんのとの〻手のうぎりひきつくーたまへらん（同 嵯峨の院）五、大宮詞 われもなせうまこの〻る目を見るべきとてもろともまいりたまひぬれバ（同）卅 おとゞ心ぢちにさだまりなバ又の日法師まありなんなせうにこの世まとゞるべきとおぼーなげきて

なせそ な ノ條ニ出ス

なそ（續古）雜下 後京極「うづもれぬ後の名さへやとめざらんなにことなくて此世くれなバ（新千）雜上 爲定「いたづらまに秋のよなゝ〳〵月見ーもなにことなくて身ぞ老まぬる（源うき舟）十 六 いかでうこれをこゞものにのにいなべきとこりなくおぼーまとひぬ（同 帚木）十 四 うらむべからんふーをもまくからぢうをめなさバ（同 若紫）十 二 ゟまいと心おとまよーありておなじ木草をもうゑなーし給へり（同）廿 四 心うくもの給ひなにか付 人しらす

補 なそ（玉葉）夏、道潤「なぎぬべき雲のねーきまも待なーて今やとたのむ郭公かな（新拾）春上 土御門院小宰相「まがひこー雲をバよそまに吹なーて峯のさくらにまそふ春風

なそ 宣長ノ傳十三、卅三 ニ云物ヲ鳴スヲ古言ニ那須ト云リ笛ヲ吹ス琴ヲカキナスナド云ガゴトシ○契云万葉ニ鳴ノ字響ノ字共ニナストヨメルモ打ナラスナリ（古）戀二「秋かぜのこひーかるらん（万）二、卅 四 ふきなせるくたのおとも

補 なそ ぬる 事也（万）十七、卅二 まつとなにらむ妹をあひてもや見む

補 なそ 如（續古）戀一、式乾門院御匣「おもひ川あふせまでとやそなおいなそもろきいのちも消

のこりけん（玉葉）雑四西行「流れ行水よ玉あはうさかさの哀あだなる此世ありけり
○此あはれ万葉よいとおほーさてかろく見るもあり（万）十二「わがこひいよるひるいもを百重なす情ーもへべいたもそべあーー（同）十一「おきたへの衣手かれて玉藻なすなびきかぬらむこそまちがてよ（同）十五、長歌云々なく子なはぬのこーかゆ（同）十三朝日奈須目細毛暮日奈須浦細毛（同）九卅やみよおもひまともを四

あされ　カナノ順ニ出ス

なー（古事記）上ノ二畫鳴注訓鳴云那志

あぞらひ（源桐つぼ）廿四あぐさむやとさるべき人々をまねらせ給へぞあぞらひよおやさるゝたよいとかたき世かとうとまーうのこおやーありぬるよ（同竹川）五中の君をおん今をこーよの聞えかろーーからぬやどにあぞらひあらばさもやとおやーけるさまよものーたまいを（同あかし）廿五

あぞらひ（同桐つぼ）廿此御ぞらよおいーませどあぞらひあらぬ身のやどのいみとう（同雲）四たゞひといあぞらふべきおとにもあらをひ給ふべきざよもあらりけり（同薄雲）四たゞひとこ夏）八たゞ今いこの内のおとゞよあえ給へる御ありさまよあぞらひても見え給いざりけり（同あけまき）六十七また此御あ

りさまよあぞらふ人世よありあんや（同桐つぼ）十二今いあやむかーのかたこよなをらへてものー給へ（六帖）四（いせ物）廿二段「秋の夜の千夜をひと夜よあぞらへて八千よーねやあく時のあらん（空穂くら開）上ノ一廿九さらよあんあき御門の聲ある源中納言あぞらひさりといひーりぞいまいいとこよあー

あそのゆりがね（艮玉）三宮「あもつけやあそのゆりがねいつまでのくさをかりでにイあいぬ君かな「逢おといあはのゆりがねいつまでのくさをかりでにイ

なそび（小大君集）春宮あてあそびのゆゝーーあるよもがさのつきさるを「くひ所これゞうねある老あはび飢たる人のくへるあるべー